

議 事 録

委員会名	令和元年度第4回 足立区男女共同参画推進委員会
日 時	令和元年10月31日(木) 午後2時～午後4時
会 場	L. ソフィア 3階第2学習室
出欠状況	委員現在数15名 出席者数13名
出席者	<p>【委員】 石阪督規委員長・乾雅榮副委員長・徳永裕文委員・石川秋恵委員・内藤忍委員・野田睦子委員・保田昌徳委員・田中裕子委員・小川節子委員・岩崎みどり委員・上野須美代委員・猪野純子委員・亀田彩子委員</p> <p>【事務局】 寺島光大区民参画推進課長、佐藤仁彦男女共同参画推進係長、武藤千恵美男女共同参画推進係係員、村山克哉区民参画支援係主任</p> <p>【傍聴者】なし</p>
会議次第	別紙のとおり
配布資料	<p>1 令和元年度第3回男女共同参画推進委員会(9/19)の要点</p> <p>2 令和元年度年次報告書(イメージ)</p> <p>その他1 令和元年度第3回男女共同参画推進委員会(9/19)議事録(その他)</p> <p>○平成30年度男女共同参画事業報告</p> <p>○男女参画プラザ講座チラシ</p>
発信者(敬称略)	議 事 内 容
寺島課長	<p><b>1. 開会挨拶</b></p> <p>・皆様、こんにちは。定刻になりましたので、第4回目となります足立区男女共同参画推進委員会を開会させていただきます。よろしくお願いたします。</p>
寺島課長	<p><b>2. 前回(9/19開催)委員会のふりかえり</b></p> <p>・それでは、本日の議題に入っていく前に、前回のふりかえりを簡単にさせていただきますと思います。お手元資料の1番をご覧ください。</p> <p>・前回でございますけれども、担当所管を呼んでのヒアリングを行っていただきました。今年度、重要課題として2点取り上げていただいておりますけれども、まず、取り組みの方向性I-3の「安心して育児や介護ができる社会の醸成」、これに関連して、地域包括ケア推進課・介護保険課・足立区社会福祉協議会、こちらの3つの所属を呼んでヒアリングを行っていただきました。25カ所、区内地域包括センターがある中で、さまざまなサービスを行っているところなんですけれども、なかなかやはり男性の地域とのつながりの疎遠、孤立というところも課題として挙げられるというような話が出てきたところでもあります。</p> <p>・また、取り組みの方向性IV-2の子供の貧困対策の関連で、「貧困の連鎖の回避のためのひとり親家庭への日常生活支援」、こちら重要課題として取り上げていただいております。こちらについては、親子支援課にヒアリングを行っていただいたところです。区のほうで実施しております実態調査の結果なども挙げていただきながら、区内のひとり親家庭の現状について話をさせていただいたというような流れになってございます。</p>
寺島課長	<p><b>3. 「男女参画プラザ講座委託に関する評価」に関する再質問および再評価</b></p> <p>・それでは議題の1番に移ってまいります。「男女参画プラザの講座業務委託に関する評価」に関する再質問及び再評価というところで、事務局からご説明をさせていただきます。</p>

佐藤係長	・再質問及び再評価ですけれども、まとめた集計表をご覧になっていただいて、何か気づいたこと等がありますでしょうか。
石阪委員長	・それでは、今お話がありましたとおり、この集計表を見ていただくと、一番高いところは10をつけていただいている方もいますし、低いところを見ると4の方も幾つかいらっしやる。合計値を見ると、これは大体5段階でいうところの3段階目、C評価でしたかね。このままもしいったとすると、前回よりは少しいのかもしれませんがC評価。普通のレベルということですが、まず、この中で、ご意見とかご感想をちょっといただきたいんですけど、特に上は比較的8が多いんですけど、下のほう、特に集客のところですね。このあたりに6と4が集中しているような気もいたしますので、恐らく皆さんの大体共通認識としては、取り組みとしてはかなり評価は高いんですけども、どうも何かそれが集客に余り結びついていないのではないかな。特にPRとかチラシがもう一つだというご意見が多かったのではないかなと思います。きょうもチラシをつけていただいていますけれども、恐らく皆さんもチラシとかPRの仕方ですね。このあたりどうでしょうか。
寺島課長	・今のところは媒体はチラシだけですか。広報というのは。
石阪委員長	・はい。区の広報誌にも出しています。
佐藤係長	・だけですよね。SNSはまだ使っていないということですね。例えばスマホで申し込めるとか。そういう感じ……
石阪委員長	・ツイッターとかフェイスブックを活用しています。
佐藤係長	・ツイッター、フェイスブックは使っている。
石阪委員長	・はい。
佐藤係長	・恐らくチラシが中心で、これで恐らくFAXか直接持参で申し込むというパターンが一般的なんですね。電話と。
石阪委員長	・そうです、はい。あとメールでも。
寺島課長	・メールか。このあたりが課題だと思いますけれども、皆さん、まず事務局から指摘のあったちょっと点数を変えると。もうちょっと高くしたいとか、あるいは逆に低くしたいという方がいらっしやったら変えていただいて構いませんけれども、いらっしやいます。どうでしょう。今の時点だったら、まだほかの方をいろいろ見てちょっと高過ぎかな、低過ぎかなと。どうですか。よろしいですか。皆さんご自身の。もしあれば修正可能ですので。
石阪委員長	・後ほど、個人の評定表を集めさせていただきますので。
寺島課長	・じゃ、書くんですね。
石阪委員長	・そのときにもし修正があれば、修正をした上で回収をさせていただきます。
佐藤係長	・お手元にある、それぞれ○のついたものを、一応全員ここにいらっしやる方は回収で、修正がある場合は、修正して回収ということになります。これご覧になると、そういうことですが、どうしましょう。これ一旦回収しますか、それとも。
石阪委員長	・そうですね。もしよろしければ、もし修正をするしないを今決めていただいて、集計表を一旦回収させていただきますので、再集計をさせていただこうと思います。
佐藤係長	・わかりました。じゃ、修正のある方、今、お手元の別紙のほう、ご自身のもの○を変更してください。よろしいでしょうか。なければ、もうそのまま構いません。
石阪委員長	・それでは、回収してください。
佐藤係長	・それでは、個別の左側にAからO（オー）まで書いてあるものを一旦回収をさせていただきます。
石阪委員長	・これでこの間、次の自由討議・意見交換にいつているところで、また最終的な集計が終わりましたら適宜報告いただくということにしたいと思います。

・それでは、まず、ふりかえりがありましたけれども、こちらのほうで何かご質問ありますか。

#### 4. 重要課題に対する自由討議・意見交換

石阪委員長

・それでは早速ですけれども、事項書の2番目ですね。重要課題に関する自由討議・意見交換に入っていきたいと思いますが、前回、ここにいらっしゃる方、ヒアリングを、前回出席されていない方もいますよね。何人かね。恐らく前回ヒアリングとあって、担当部署の方にお越しいただいて、お話を伺う機会がありました。それが今の要点のところ、資料1のところ、簡単にまとめていただいています。

・1つ目は、安心して育児や介護ができる社会をつくろうということで、主に福祉部門の部局の方に来ていただいた。いろいろ皆さんからも質問いただいたりしました。2つ目のテーマが、貧困の連鎖の回避のためのひとり親家庭への日常生活支援。親子支援課の方にお越しいただいて、ひとり親施策についていろいろとお話を伺ったと。資料を説明いただきながら、課題点なんかも整理いただきました。中身の本当の詳しいことは、議事録がお手元にあると思うんですが、膨大な量なので、ただ議事録読んでいるだけでもちょっとおもしろいですね。パラパラ僕も見ましたけれど、こういう話がされたなど。恐らく前回出席された方も、もう多分記憶のどこか彼方のほうに行ってしまったと思うので、改めてちょっとふりかえるという意味では、これを読むというのもいいんですが、ちょっと時間が今日とそれからもう次回である程度報告書をまとめていかなければいけないということになりますので、早速ですけれども、この2点、主に2点ですね。皆さんからご意見・ご提言をいただくという場にしたいと思います。

・まず、1点目ですが、育児や介護ということで、1つの課題は介護サービスの担い手が圧倒的に女性が多いということですね。男性の割合が大体4人に1人ぐらい。つまり、75%単純に、圧倒的に女性が多いので、これは1つ課題ですねという話でしたし、それから、なかなか人材の確保も難しいということでした。つまり、介護人材として、なかなか新規の供給がないということ。それだけ、恐らく介護の現場はかなり厳しい就業環境にあるとも言えるわけですよ。若い人もなかなか入ってこないということですから。

・それから、2点目の大きな1つの課題としては、やっぱり地域のいろんな住区センター等々いろいろ見ていると、どうしても男性の参加が少ない。地域の中で男性が孤立しているというケースも課題としてあるということですので、いわゆる男性の孤立問題、こういう言い方していいのかわかりませんが、リタイアされた後、男性がなかなかネットワークをつくれずに孤立してしまっているケースが多いと。

・一方、女性のほうは、いろんなところに積極的に来られるということでしたので、ちょっと男性の問題ということで、1つ課題として上がっていました。

・それから、あとは制度の問題もあったんですけど、これは地域包括センター今動かして、地域的な差というのも1つあるということですので、このあたり地域差の問題をどうするかということも課題になります。

・ほかにも幾つかあったんですけど、とりあえず大きな課題点としては、このあたりだと思うんですが、まず、介護の点について、皆さんからどこがまず課題になっているかということ、ちょっといただきたいんですけど、どうでしょう。皆さんがお聞きになって一番の課題点。今のこの育児もいいんですけど、特に介護が多かったんですけど。

・僕はまず1つ、やっぱり人材不足、これは今後、足立区にとっても大きな課題になると思うんですよ。遠い将来は、恐らくもう自分たちの区の中で供給できない

	<p>となると、よそから人を入れていかなければいけない。場合によっては外国人人材の登用なんかも視野に入れながら、この人材不足をどう回避するか。もし皆さんからご提言、ご提案があれば、改めて区長のほうにも提言・進言したいと思いますので、若い人がなかなかこの現場に行かないということですよ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・猪野委員、どう思いますか。この人材。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり人材不足していると思います。このあたりのところしか私は余り知りませんが、このあたりで介護施設や病院とかを全部を運営しているような会社さんとか、毎年新卒もちゃんと十何名とか採って、ワーク・ライフ・バランスとかも考えたりとか、いろいろやっていますけど、多分、継続してずっと勤めるかどうかとなると、多分、途中で辞めてしまうとか、そういう離職率が高いのかなと。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり雇用という意味でいうと、不安定だったり給料が安いとか、待遇が厳しいとか、そういうことですか。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。待遇面じゃないでしょうかね。お給料面と、それからやっぱり土日休みというわけではないので、職種によっては、事務方の人とかは土日休みとかあるかもしれないですけど、本当に介護に従事する方は関係ないので、それでも結構若い方はいらっしゃいますけどね。好きでやっているという方もいっぱい働いていらっしゃいます。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これは恐らく保育も同じですよ。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結局、人材不足で、どこの保育園も結果的には受け入れはできるんだけど、結局人材がないから、保育士という意味でいうと、なかなか定着しないという問題もあって。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・待遇面が一番でしょうかね。介護の場合は、24時間体制みたいな職場だと、結局夜中ひとり何十人もの介護する方を見なきゃいけないとか。でも、自分の体も腰を痛めたり、あっち悪かったりとか、そういうのも増えてくるらしく、だんだんやっぱり厳しいというのは聞きますね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恐らく現状としては、こんな感じだと思うんですが、例えば、石川委員、どうでしょう、介護人材ってなかなか集まらない。</li> </ul>
石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。ハローワークとかでも人材不足の……</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・求人は出るんですよ、恐らく。</li> </ul>
石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・求人は多いです、はい。求人は多いですけども、やはり担い手として求職者は少ないですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それはどういうところがやっぱりネックになっている。</li> </ul>
石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・条件というのが大きいんじゃないかと思います。ハローワークは区のほうとも共催で介護も保育も面接会等はさせていただいては、年通して定期的にやっていますね。やっているんですけども、なかなか集まらないのが現状だと思います。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あと保育のほうはどうですか。</li> </ul>
石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育も同じですね。保育は多分、新卒ではやりたいという方はいると思うんですが、実際に働いてみて、労働条件であるとかというところで離職をすると、なかなかまた保育で再就職というのは希望されないという方が多くて。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結構、潜在的保育士という方もいらっしゃって、資格はお持ちなんだけれども、やっぱりきついから、資格だけ取って保育職に就かないという方も結構いると聞きましたけど。</li> </ul>
石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり労働条件ですね。</li> </ul>
石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だと思えますね。</li> </ul>

石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これがやっぱり構造的な問題にもなっていて、例えば介護人材を、給料例えば上げようとする、その分保険料が上がるとか、どこかで負担を増やさなきゃいけないということにもなるので、なかなか上がっていかないという面もあるし、保育の問題もそうですね。保育の質を高めようと思えば、その分結構いろんな環境整備も図っていかなくちゃならないので、結構大変だと。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内藤委員、この問題どう思いますか。結局、人材。</li> <li>・前回、少しこの問題意見させていただいて、やっぱり労働条件の問題が大きい。これは賃金だけではなくて、労働時間とか、そういった、特に出産されてから復帰できないという方は、ワーク・ライフ・バランスが保てない。こういうことも多いと思うんですけど、そこを行政としてどう支援するかですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結局そこですよ。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何ができるのかということですけど。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はい。あとは、どういうところに重点化したほうがいいのかということについて、介護の担い手にどうアクセスするかという問題ありますけれども、保育士の場合例えば実態調査を行って、どこからテコ入れしていけば一番戻ってきてくれるか、こういうことをやっていますので、介護の担い手となる人に対して、どこが一番いい策なのか、効果的な策になるのか、そういうのを行政として、足立区さんとしてやるというのは1つあるかもしれないですね。何でもやればいいというわけではない。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。あと、女性が非常に多いという点についてはいかがでしょうか。この点は。やっぱり75%、4分の3は結局この担い手は女性と。つまり、1つの問題点は男性がこの分野に入っていないというのも、やっぱり慢性的な人材難をむしろ助長しているような気もするんですけど、結局女性の仕事という意識が非常に強いんじゃないかなと、一般的に。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そこは表裏一体的にあるのが労働条件の問題で、非正規の人も多いでしょうし、時間単価で見ても、多分正規でも安いし、細切れのワークが多くて、なかなか家族を支えていけないという感じで、参入が男性には厳しいということはあるかもしれない。あるでしょうね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だから、この問題ですね。実際に現場にいる方って、男性が保育士とか介護士というのを何か嫌がる傾向ってあるんですか。例えば、実際に男性が女性の介護をすることになったときに、ちょっと変えてくださいみたいな。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者さんの比率によるかもしれないですね。男性が多ければ男性の職員さんもそれなりにいるというか。一番は入浴とかの介助で、やっぱり女性の利用者さんが男性の職員さんに手伝ってもらうのを嫌がるという傾向は今もすごくあるらしいので。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だから、こういった問題も多分あるのかもしれないですね。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうです。男性はドライバーさんが多いですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もう男性の役割って決まっているんですね。大体。施設に行くと、例えば……</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。シニアの方が多いですけど、ドライバーさんはほぼ男性ですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育施設とか幼児施設もドライバー多いですね。男性がほとんどドライバーになっていて、そう考えると役割分業みたいなのところがあるのかな。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。やっぱり力も車椅子を扱ったりとかそういうのもあるので、多分女性よりは男性のほうが。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうすると、何かそういった要因も場合によってはあるのかなという。なかなか男性が入りづらい。行ってもなかなかやれる役割というのは限定されますし、先ほ</li> </ul>

	<p>ど内藤委員が言われた給料は安いということはもちろん、待遇が厳しいというのはそうなんですけど。</p>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。多分、ドライバーさん皆さん正規の正社員とかではなくて、本当にパート的な時給の契約だと思います。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これは難しいところですね。どうすればいいのかということですね。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余りフルタイムで働きたいといっても働けないんですよ。逆に、若い方は働けますけど、ちょっと年齢がいくと、フルタイムじゃなくて4時間以上6時間未満とか、何かそういうような条件が結構出されています。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人的には、もっと男性が介護や保育の現場に参入するというのが、そういうことをやっている自治体って余りないんですよ。実は募集をかけていることは結構あっても、例えば男性向けにPRをすとか、例えばシニアの世代とか、ああいう人たちに積極的に保育とか介護の分野に来てくださいというような、もっと積極的なアプローチがあってもいいのかなと。むしろ足立区としては、そういう発信があっても。</li> <li>・乾委員どうですか。男性にここに入ってきてもらうというのはやっぱり難しいですかね。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性が入って多くなれば、賃金も上がるでしょう。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結果的にはそうなんですよ。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり女性の仕事は賃金が安いということですよ。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・僕もどこかで申し上げたと思うんですけど、例えば保育とか幼稚園の教諭なりがなぜ給料が低いかというと、女性の比率が非常に多いからですね。これは小学校、中学校、高校、大学といくと、男性の比率がどんどん上がって行って、給料も同じようにどんどん上がっているんですよ。だから、男性の多い職場というのは、基本的に給料が多いというふうにも。</li> <li>・そうじゃないですか。保田委員、どうですか。男性がやっぱり多いところって、どうしても給料を上げざるを得ないというか、そうでもない。</li> </ul>
保田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うちの会社のことだけで言えば、仕事を何をやっているかとか、性別だとか、そういうもので給料に一切に差はつけていません。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的に関係ないですよ。</li> </ul>
保田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冒頭にお話ししたと思いますけれど、うちの会社に入ってきたいと言っていただく方は女性の方が圧倒的に多くて、今回も来年の4月に入社してくる新卒の方をいい方ということで採用すると、結果的に全員女性になってしまう。なっていましたじゃなくてなりましたです。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういう意味では、だからこの分野だけがちょっと異質なのもかもしれません。これだけやっぱり女性が多いというのは、バイアスががかかっているかもしれないですね、採用のところ。</li> </ul>
保田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私どもの会社は実はエレベーターの会社ですけども、11年前から介護サービスの仕事もやっております、具体的には特定福祉用具の販売とか貸与ですね。皆さんにわかりやすく言うと、介護ショップという仕事をしています。定期的に私も制服に着がえて現場に出て、こういう地域包括センターとかそういうところにお邪魔すると、確かにケアマネジャーさんとかそこにいらっしゃる女性の方がほとんどで、皆さん本当によく頑張っているというイメージを受けるんですよ。こういうお仕事って24時間待たないですから、例えば私たちでも在宅で介護されている方にベッドをお貸しして、レンタルしてもらって、その方がお亡くなりになると引き上げなくちゃいけない。いわゆる、そのご遺体が戻ってくるのにベッドをどかさないとそこにしつらえることができないので、夜10時とか</li> </ul>

	<p>11時に呼ばれたり。当然、そういうことのアテンドというのはそのケアマネジャーさんがされていますから、本当に大変だなと思うんですね。いろいろとケアマネジャーさんにこういう新商品がありますよとかっていろいろ私たちもチラシをつくって持っていったりしますが、一番喜ばれるのは簡単につくれる夕飯のおかずのつくり方とか、そういうことで非常に皆さんよく頑張っているなというふうに思っています。ですから、逆に言うと、そういう女性の方、人手不足というのは私もちよっと、初めてこれを見て人手不足なのかというところは感じていますがね。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あと、ケアマネジャーさん、結構職場を移る方が多いものですから、あれっ、この間この人どこかで見たなと思うと、今度違うところでお見かけしたりだとかという部分のところで、ストレスもたまるお仕事なんだろうなと思いつつも一緒にご一緒させていただいていますけれども。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケアマネは恐らく男性比率もっと高いんじゃないですか。結構男性の方多いですね。ケアマネジャーやっている方はね。</li> </ul>
保田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最近、やっぱり特養とか有料老人ホームだとか、それから包括だとか、そういうところの男性が、若い男性の方が増えてきているような感じもしますね。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はい、ありがとうございます。いろんな情報は多分、皆さんは。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小川委員はどうですか。例えば男女の比率がかなり違うというこの業界。</li> <li>・私もそんなに詳しくは常日ごろ接することはないんですけど、ざっくり見てもやっぱり先ほどのデータどおり、4分の3が女性というような形はどこでも見られますよね。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱりここは男性は入りづらい。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入りづらいというか、概念としまして、先ほどの入浴シーンとか食事を差し上げたり、そういう概念が女性の分野ということで、こびりついているんじゃないかなと思うんですね。ですから、その概念を変えるためのもっと男性を引っ張ってくるとか何とかよりも、頭の中の改善から取り組んでいかないと……</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、たしか日本人はすごく強いといいますよね。そこの何でしょうかね。海外なんかは、それこそ本当に男女関係なく、そこまで男性が嫌だということはないんですけど、保育でも介護でも日本人の場合は。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・嫌だというんじゃないかと、そこまで男の方が自分の元来埋め込まれたデータを変えることができているんじゃないですか。そういう訓練ができていないとか、そういう社会に接することができない。まだ関係ないですと来ちゃったら、いつの間にか自分の家族、お母さんをお嫁さんが全部やってくれていて、そういう現実で最近ちょっと戸惑うという。その年齢になって初めてその分野を見るから、手の出しようがないということになるのが今の現状じゃないかなと思います。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恐らく、だからそういったところが小さいときから頭の中に植えつけられていて、これはもう女性の役割だから。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絶えず平等、平等ということで訓練をして、頭の中を柔らかくしていかないと、せっぱ詰まったときには、自分はもう、やりたいけどできないという、固まってしまっている。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例えばご自身が患者の、今度は介護される側になっても、やっぱり嫌なわけですね。男性にされるというのは。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういうことですよ。お互いが慣れていないから。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうそう。</li> </ul>
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・田中委員、どうですか、この問題、結構難しいですけど。</li> <li>・そうです。本当に一概に言えないものがあるなと思いますけれども、確かに意識</li> </ul>

	<p>が変わっていくとか変えていくということの難しさはあると思うんですね。例えば、ちょっと離れますけど、お医者さんという男性を想像するというか、女医さんとわざわざ言わないと女性のお医者さんと思わないというのと同じように、この女性が得意とする分野というか、見慣れている部分でそうなっているのかなという。だから、保育士さんにしても、やっぱり普通、保育士さんという女性と思うけど、男の保育士さんなんだというのと同じように、わざわざそういうふうに言うということは、みんなの頭の中で、これは女性、これは男性というのがどこにあるので、意識を変えていくのには、本当に時間がかかることなんではないかなというの思います。</p>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それこそ、学校の実際の教育現場なんかは、かなりその辺はなくなってきていますよね。余り男の子だから女の子だからということはほとんどないですよ、今ね。</li> </ul>
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それはもうないですね。それこそランドセルの色からしてね。変わってきていますね。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もう今は、いろんな色ね。黒、赤じゃないですものね。今の時代はね。</li> </ul>
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はい、そうですね。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だから、教育現場までは別に、恐らくそういうことはないと思うんですけど。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護は、介護を経験した男性の方は、その次からは割とふらっと率先して手伝うとか、介護の現場に行くとか全然抵抗なく皆さんされるんですけど、その前、特にお仕事されている40代、50代ぐらいのときにご家族が介護が必要な状態になっても、多分、本人は自分のこととしては何かそういう集まりがあったりとかしても、まず参加しないですね。どんなにお声かけても男性は参加しない。いらっしゃるのはやっぱり女性の方。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なるほどね。そういう問題もあるんです。だからね。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そう。だからお嫁さんがよく相談にも来られるんですけど、義理のご両親の介護をしたり、どこかデイケアとかに行かせたいんだけど、ケアマネに繋がりたいんだけど、結局ご主人が反対しているのでできない。ご両親も息子さんをやっぱり尊重するので、自分たちのことはいいからみたいになって、結局進まずにどんどん介護度が進んでいっちゃうみたいで、そういうご相談が結構あるので、やっぱりその認識の違いというか、もっと40代ぐらいからそういうのを見ておくとか聞いておくとか、全然。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体験するとか、それだけでも全然違うと思うんですよ。実際ね。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうなんです。そうしてほしくてお声がけしても、まず出てきてくださらないですね。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今、教育現場の話を出してくださったんですけど、確かに教育現場では両性ともに同じことを学ぶ。名簿も一緒になって。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今、混合名簿ですね。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういうことだと思うんですけど、子どもたちが見ている役割、ロールというのは、恐らく大人が演じているんだと思います。だから、大人社会が変わらないと子どもたちの未来は変わらないので、今大人の現実を変えるために、大人が変わるんじゃないくて、子どもたちが見るこの鏡のために我々が変わらないと、恐らく子どもたちにはそういうふうには入っていかない、意識の中に。だけど、そうは言っても、こっちが変わるのがまた難しいという問題があるので、例えばですけど、今の話を伺っていて、男性保育士とか女性医師とかいるわけなので、今でも。そういう人たちをむしろ強調して今の子どもたちに見せることを、こういうロールもあるんだよと、ロールモデルを強調して見せていくというのは、それほどお金もかからないし、自分たちの進路として、あり得るんだということを植えつけるにはいいのかなと。</li> </ul>



石阪委員長	<p>恐らく家庭の中でも、なかなかそうは演じ切れていなくて、保護者は。やはり、それまでの役割分担で家事をしたり、育児をしたりの部分がやっぱり多分に残っていると思うので、それを是正するような形を行政がどうできるかというところ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・例えば、学校で介護の人を呼ぶというときに、意識的にちょっと男性の方に来ていただくとか、今度お医者さんの何か講話があるときには、女性のお医者さんをちょっと入れてみるとか、ちょっとそういう、教育現場でもやっぱり大人のほうである程度工夫しないと、幾ら平等だといっても、なかなか伝わらないだろうということですね。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無意識だと多分、マジョリティーである性別の人が出てきて話しするということになると思うので、それは何か講演するという場面でなくても、例えば学校で何々検診とかありますよね。ああいうときに女性の医師が来るとか、そういうことでもいいかと思うんですね。すると、そういうことが普通に思えるでしょう。</li> <li>・以前、女性のメルケル首相の政権が続くドイツで、男の子がメルケル首相に「男の子でも首相になれますか」と質問したことがあったそうです。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・逆にね。そういうこと、あるかもしれないですね。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そう。そういうふうになったということがあったので、やっぱり大人の世界でどういうふうに役割を演じられているかというのは、インパクトがあるんじゃないでしょうか。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。そういう意味では何かこれ、配ってもらったこの男女共同参画報告書があえてこれは男性を持ってきているんですね。ここにね。お父さんと、これは娘さんかな、一緒に遊んでいる、シャボン玉やっている。だから、これは意識して多分やっていると思うんですけど、女性じゃなく男性を入れていると思うんですけど、これが逆に当たり前になるような、そういうような……</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。あともっと目を、早い段階で目を変えるということは、お給料を上げることですよね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まずはね。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お父さん方でも今の社会的なお仕事に就くことと同様に、介護の世界でもこれだけ家族を養っていけるんだよという保証とかそういうものがついて回れば、やはりもっとそこの職業を選ぶ方も増えてくる。増えてくれば、数の勢いで見方も変わってくると思うんですよね。そういうのが一番近い見方です。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だから1つは給料・待遇の問題ありますよね。これを改善して、ある意味では、さっき言ったように家族を支えられるだけの給与をちゃんと支給するというのももちろんです。それともう一つはやっぱり地道ではありますが、教育現場の中で、ある程度意識的に大人のほうで、こういった工夫をしていくということもしていかないと。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・効果は薄いと思うんですよね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それこそ医学部なんていうのは、ちょっと前までバイアスかかっていたわけですね。どこかの大学ではね。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうです。女性をあえて蹴ってね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だからそういうことをやっているんで、やっぱり医師はどうしても男性というようなイメージが定着してしまうので。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、そういうことを自治体で日本でやっているところがあるかわからないんですけど、イギリスは全ての自治体で、その全ての行政施策が男女平等になっているかという視点を入れなきゃいけないと法律で決まっていて、例えばこういうチラシについても、それがジェンダーバイアスを助長しないかというのを審査が入るといふふうになっています。そうすると、今ご紹介してくださったこういうのであると</li> </ul>

	か、これはジェンダーを変革するものですのでよしということになるけど、女性だったら問題だよねというふうになると思いますね。
石阪委員長	・こういうのは恐らくいろんな区が出しているチラシを、例えば一回、男女共同参画部局に全部集めて、ジェンダーバイアスかかっているかどうかも含めてチェックをするところを、僕はやっている自治体知っていますね。
内藤委員	・日本でですね。
石阪委員長	・うん、日本で。
内藤委員	・すばらしいですね。
石阪委員長	・一応ちょっと目を通す。明らかにこれちょっと女性の数が多いとか、あるいはこれはちょっと問題あるよねという場合は、ちょっと修正をかけるというようなことをやっているところもあるにはあるんですよ。多分、区でやったら結構大変かな。結構ここにきて見てくれということになったら、結構ある意味で専門的に見なきゃいけない。結構大変ですね。実際ね。
寺島課長	・でも、全体的に区として、今言ったようにジェンダーバイアスかからないようにという意識はかなり各所が持っていますので。
石阪委員長	・各部局で、その辺はもうかなり配慮して。
寺島課長	・そうですね。例えば、子育てのイベントのチラシなんかでも、お母さんと子どもだけではなくて、当然そこにお父さんも入っていきやおかしいよねというような考え方は徐々に皆さん持つようにはなっています。
石阪委員長	・料理講座なんかは女性だけというのも結構今まであったんですよ。エプロン着た女性がここにいて、だからそうならないような配慮は、それぞれの各部局が今されているということですので、だから……
石川委員	・一時期、男の料理というので、男の人たちがこれはプライベートのお教室だったりなんかするんですけど、習いに行っている人たちが、一時、話題になって増えましたよね。
石阪委員長	・うん、増えました。だから、そういうところにも。
石川委員	・今はある程度数も増えて、やるのも……
石阪委員長	・今、結構人気講座ですね。男性の料理教室は意外に人気あるという話ですから。
石川委員	・ですからもう、1つ成功例ですよ。
石阪委員長	・だから、そうやって自治体のほうも、積極的にこういうパンフレットとかそういうところをある程度各部局に、きちっとその辺はジェンダーバイアスかからないような工夫をということは1つ提言として言えるかもしれないですし、それからさっき言ったように教育、特に足立区は初等教育を担っていますので、そのあたりで例えばいろんな配慮ですね。子どもたちにそういう変な意味での大人の世界を、きちっと大人のほうがそういった配慮をするということかな。こんなこともできるかもしれないですし、あと。
猪野委員	・1つだけ介護の現場でも変わってきたのは、作業療法士さんというような資格を持った方々、以前は男性がほとんどだったんですけど、最近は女性の方もすごく多くて。
石阪委員長	・作業療法士さんとか理学療法士さんというのは具体的に介助、訓練をする人ですね。
猪野委員	・そうですね。
石阪委員長	・その方、昔は男性が。
猪野委員	・ほぼ男性だったんですけど、今は女性の療法士さん、いろいろ分野はあるんですけど、が増えて、結構女性の先生もいらっしゃるの、そういう意味では、そこは変わってきた。やっぱり資格がある分お給料もきつといいと思いますし。

石阪委員長	・恐らくそうなのでしょうね。
猪野委員	・そういうことと比例して、女性も結構進出してきていますね。
小川委員	・現場の業務の発展というか、力をそんなに要しなくても、女性が訓練士になれるというのが、そういう発達性も加味していい現象になっているんでしょうね。
猪野委員	・世の中の整骨院とか接骨院は割と男性の先生がまだ多いかもしれないですけど、徐々に女性も増えてきているのと同じように、そういう介護施設や病院の中で働くそういう方々も女性が増えてきて。
石阪委員長	・恐らくそれはやっぱり待遇の問題も大きいんですかね。
猪野委員	・多分。
石阪委員長	・ある程度の給料と待遇を担保してあげると、女性の比率もどんどん上がっていくとか、むしろ同数に近づいていくという感じですかね。
猪野委員	・はい。
石阪委員長	・これは例えば、法律の世界、徳永委員、どうでしょう。今どれぐらい、どんな感じですか、法曹界というのは。
徳永委員	・男女の関係ということですか。今、データ調べたんですけど。
石阪委員長	・恐らく待遇は悪くないと思うので。
徳永委員	・弁護士とかということですか。
石阪委員長	・うん、弁護士さんとかどうなんだろうと。
徳永委員	・何か女性の割合は結構増えて……
石阪委員長	・何かよくテレビドラマでは女性の弁護士さんって見ますけど、実際にどうなのかなとか。
徳永委員	・1950年って女性割合0.1%だったらしいんです。弁護士。
石阪委員長	・0.1%。
徳永委員	・2017年、今手元の資料、最新なんですけど、今、18.4%になっています。
石阪委員長	・まだ2割に達していないんですね。
徳永委員	・上がっているけど、まだまだという感じで、うちの事務所も19人いますけど、弁護士が。女性は5人なので、大体同じような割合になります。なので、僕ちょっと気になるのは、弁護士って男性が多いです。うちもちろん事務局、スタッフ雇っていますけど、事務局、全員女性なんです。
石阪委員長	・スタッフは。
徳永委員	・スタッフは。そういうところに医者と看護師みたいな関係に近いところがあるじゃないですか。何かそこにもやっぱりバイアスみたいなものがあるのか。別に女だけ募集とか男だけ募集をしているわけではないんですけど、来ないんです、募集がね。男で来るのはせいぜいバイトとか、大学生なので。
石阪委員長	・いわゆる事務所のスタッフ募集というと女性が来るとのことなんですね。
徳永委員	・そうです。
小川委員	・だから、お給料面とかそういう待遇に問題があるんじゃないですか。
徳永委員	・待遇はもちろんあると。もちろん弁護士とスタッフじゃ弁護士の給料はよいので。
石阪委員長	・そうですね、給料は当然いいわけですから。
徳永委員	・やっぱりバイアスと待遇がそういう構造を生んでいて、バイアスがゆえにそういう待遇になるのか、待遇ゆえにそういうバイアスになるのかよくわからない。鶏が先か卵が先かわからないという感じですけど。
石阪委員長	・でも、ちょっと医師に比べるとまだ少ないですね。法律の世界は女性がね。法学部の数なのかな。
内藤委員	・医師も弁護士もそうですけど、やっぱりその歴然とした差、地位差というものが

	<p>あつて、おっしゃる労働状況の中にももしかしたらそのハラスメントみたいなものもあるのではないかなと。よく、実を言うと弁護士事務所のハラスメントの話は聞きます。やっぱりそれは医師でもそうですけど、明らかに力の差があつて、そこには強い口調などが生まれやすい。</p>
<p>徳永委員 石阪委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主従がやっぱり強くなります。</li> <li>・ある種の権力関係がそこにできてしまつて、そういうことね。確かに難しいですね。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、ある意味ではその給与の問題ね。これはやっぱり多いですし、結局何で介護、保育のところに結果的に男性が少ないのかというと、1つの理由はやっぱり給与と待遇が安いとか低いところから来ているので、ここはひとつやっぱり改善策をある程度早急に講じないと、結局人材不足のままですね、恐らくね。なかなか。そのうち女性も来なくなってくるので。</li> </ul>
<p>小川委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。女性も家庭を築いて自分の給料で引っ張っていくという、どんどん増えてきていますからね。</li> </ul>
<p>石阪委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。だからこの問題については、いろいろな意見が出ましたけれども、恐らく皆さん一致されているのは、やっぱりこの待遇とか給与面、これを何とか改善するための区としての何らかの施策を、やっていますね、でもね。区は家賃補助とかやっていましたっけ、保育士の。</li> </ul>
<p>寺島課長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士はやっていますね。</li> </ul>
<p>石阪委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護のほうはまだない。</li> </ul>
<p>寺島課長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっていないと思いますね。</li> </ul>
<p>石阪委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・区として特に入れていないですもんね。別にね。</li> </ul>
<p>寺島課長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士はやっぱり保育士確保のところでは奨学金を免除したりとかいうのもありますし、いろんな施策打っているんですけども、介護の分野ではそこまで金銭的に何か投入してということはやっていないですね。</li> </ul>
<p>内藤委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すみません、1点。委員長、最初、外国人人材の話をちょっとおっしゃったんですけど、いろいろな法整備をしない中で、条件の整備をしない中で外国人というふうになると、外国人だったらいいのかという話になりかねないので、そういった外国人が来た場合も、これも女性外国人が多かったといったことだと、それでいいのかというと、そうじゃないと思うんですね。だから、やはり誰であろうと何人であろうと、適正な労働条件で仕事できるような条件を整備するのが筋じゃないかなと、私は思います。</li> </ul>
<p>石阪委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。ただ、不安なのは実際に増えているという現実で、要するに、給与を上げる気がないんですね。だからそういうことをいうと待遇面でも。同じような置かれた状況の中で人を雇い続ける限りは、恐らくそういった問題が懸念されるので、むしろそれはどっちかというとなガティブな意味で、ちょっと考え直さなきゃいけない。そうならないようにするために、ある程度、もし入ってきてもらうんだったら本当にある程度の待遇のもとに入ってきてもらうという方向でやっぱり考えていかないと、恐らく今、安易に給料だけを維持したままで入れてしまうと、外国人材どんどん入ってきますから、国はどちらかというとな開放政策を今採りつつある中で、ちょっとその辺は区としても慎重にいかないと。特に、子供たちに接するような業種になってくると、やっぱりある程度の専門性であったりとか、だからそういう意味では今、待遇がちょっと悪過ぎるのかなという話ですよ。</li> </ul>
<p>内藤委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・労働条件の中にはキャリアアップする、自分で勉強するという、自分でというか、研修していくということも含まれています。</li> </ul>
<p>石阪委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね、はい。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あと、ちょっと続いての問題ですけど、皆さんに伺いたいのは、この男性の地域からの孤立という課題ということですけど、僕もいろんな方に伺ってみると、やっぱり女性と男性、これは比較していいのかわかりませんが、女性は比較的住区センター等々でさまざまな活動をされていますけど、前回の話でも男性の孤立化が懸念されるというお話でしたから、上野委員、男性って何やっていますか。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性はうちのほうは囲碁を結構やっていますよ。囲碁とか、囲碁専門ですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・囲碁ばかりですか。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・将棋とか。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・囲碁、将棋できない人は。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あとはもう、ほかいろいろみんな手伝っていますけども、男性はやっぱりほとんど余り来ません。そういうのはやりたがらないですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何をされていますか。みんな高齢の男性は一体。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性はあとスマートボールとか、うちにありますからそういうのとか、あれをやっていますけどね。あとは余りないですね。あと、何かしゃべっているとか。しゃべりに来るようなもんですよ。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カラオケですかね。あとね。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カラオケは結構、盛んですね。カラオケはもうすごいですね。皆さんね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ちなみに住区センター、出てこない方も結構いるんですか、男性。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほとんど余り出てこないですよ。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・じゃ、センターのほうには圧倒的に女性。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もう女性で、出てくる男性は大体決まっています。もう決まった人ばかり。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それ以外の男性って何やっているかわかります。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・働いているか、うちにいるか。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・じゃ、テレビ観ているとか。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誘っても来ないですね。行きましようよと言っても。いいところあるんだからということで。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例えば、お一人になってしまった場合というのは、これは孤立化というのが懸念されるわけですけど、出てこない。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うん、出てこないですね。余りひとりになっている人は、私見たことないから。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どういうこと。ひとりになっているというのは。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとりの人は余りほとんど見ていないからわからないですけども、男性が何か出づらみみたいな感じですね。女性が多いから。女性に圧倒されちゃうんじゃないかな。ありますね。何でもそうみたいですよ。いざ何かいろいろお祭りなんかあると結構出てくるんですよ。食べるものがあるから、それにつられて出てくる人もいますよ。お祭りなんかはね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あと、町会とか自治会はどうですか。活動を頑張っている。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自治会も大体活動するのは女性です。女性です。男性は掃除でも何も余り出てこないです。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要するに、会長さんとかは男性が多いけれど。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今は女性も増えていきますね。私もそうですけど、女性が増えて。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性は余りやらないですか。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何かわからないですね。それはね。指名されてやっているものですからね。やってくださいって。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何されているんですかね。男性はね。ご存じの方、どうでしょう。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性はちょっとだらしないから。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家にいて植木をいじるとか。</li> </ul>

石阪委員長 猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、いじっているんだっいたらいいですけどね。別に植木があれば。</li> <li>・圧倒的にいる時間と自分がしていることの比率はもう、こうですよ。本当にぼうっとしているみたいなので、行かないんですかと聞いても嫌だとおっしゃる方が多いです。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・嫌がりますよね、男性。余り言うと、かえって怒られちゃうから、難しいみたいですよ。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間関係が嫌みたい。住区センターとか行って、お友達がいればいいけど、まずいないんですよ。行って、友達になるかという余りないし。そこで何か近所話だ、人の話だとか出てくるとそれが煩わしいから、もう行くのやめたという話はしてます。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これ例えば行政として、どんな講座やどんな施策をすれば男性が地域の中に来てもらえるかということ、もしここで提言するとすると、このままだと孤立しているのはしょうがないで終わっていく可能性。テレビ見ていけばいいじゃないかということでも終わっていきそうなんですけれど、何かないですかね。案としては、どう。</li> </ul>
亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何か私、自分の父がちゃんと社会人として働いていて、親の介護もしていたのに、やっぱり自分が老後になると、うちの中で、初めはお料理とかやっていたんですけど、やっぱりやらなくなってしまって。</li> </ul>
石阪委員長 亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何されていらっしゃいます。</li> <li>・何しているんだろうと思ったら、やっぱりぼうっとしているか、お酒飲んでいるかで、本当に悪循環で。</li> </ul>
石阪委員長 亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとりで飲んでいるんですか。誰かと飲んでいるわけじゃない。</li> <li>・ひとりで。夕飯の楽しみしかなくて、しかもお惣菜とか買ってきたりとかで、それでここに来て、何かできることないのかなって考えたんですけど、社会人として多分、昔、昭和のときって、50歳以降だと役職定年とかあって、定年までの間って割と自由に暮らしていたと思うんですけど、今ってもう多分75歳ぐらいまで働くと考えたときに、ぼうっとしていた分だけ、その人が遅れをとっちゃうと思うんですよ、75歳まで生きるのに。だから、何か会社とかに向けて、行政からその定年までの間を自分の残りの100歳までの人生をどうやって生きていくかとちゃんと考える機会を行政からも言って、何かそういう。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういう出張講座とかあってもいいですよ。例えば、ちょっとかわいそうですけど、50歳過ぎて、昇進も昇給も余りないような、将来を見据えなきゃいけないときに。</li> </ul>
亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、本当にそうになっているじゃないですか。もう55歳で役職定年になりますし、多分その62歳までの7年間、20代とか30代の人にこき使われてぼうっと過ごすか、自分の次の人生をちゃんと考える時間を持つかで、多分すごい人生変わってくるのかなと思います。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういったマニュアル本は、でも今いっぱい出ていますけど。老後どうするかを備えるみたいな。</li> </ul>
亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんな自分のことだと思っていないんですよ。そういう方は絶対見ないので。自分たちはそんな老後になる予定がないから。でも、蓋を開けたらそうなっていて。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・確かにおもしろい提案かもしれないですね。余り講座なんか見ているけど、このあたりをターゲットにした講座って多分、余りなかったと思うんですよ。今までね。将来に備えるということですね。</li> </ul>
亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、自発的には絶対来ないので。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もう行っちゃうんですよ。アウトリーチじゃないですけど、企業のほうに出向いて行って、もう50歳過ぎた人は強制的に講座、会社のほうで。</li> </ul>

猪野委員	・前回、内藤委員が、そのご提案されていましたが。
石阪委員長	・そう、これ。
内藤委員	・いかに強制的にやるかです。
石阪委員長	・強制するかね。
猪野委員	・40歳過ぎると、名だたる企業は、そういう年齢で切って、その人たちを対象にセミナーに行かせるんですよ。それ強制なんです。1泊とかもあれば、1日とかもあれば。そこで自分の老後のプラン、マネープランだったり何をどうするかとか、考え方だったり、そのいろんなカリキュラムを組んだものを受けるんですけど、余り我が事のように思っていないですね、多分。特に男性のほうが自分は違うと思っ ていらっしゃる方が多い。それを私、受けたのも50代のときだったんですけど、 もっと早くに受けたかったと思ったんです、そのときに。じゃないと、プランって 立てられないですよ。だって受けてすぐもう何か肩たたきみたくなっちゃったら、 何もできないですよ、準備が。だから、本当40歳なら40歳になったときに、 何回かに分けてそういうのを受けるカリキュラムを組んでしまって、それで少しづ つ世の中のこと知り、自分でどうしようかと考えられ、考えられた人は早期退職 をするのもありだし、ぎりぎりまで働くのもいいし。
石阪委員長	・今どっちかという、働く圧力が強いから、なるべく老後をつくらないようにか なり国もプレッシャーかけていますけど、むしろどう老後を送るかという議論が余 りないですかね。老後って決してそんなネガティブなものじゃなくて、リタイアし た後、どうやって充実させるかというのは大事なことなので。
小川委員	・その充実期間を考えないまま現代に来ちゃっている。
石阪委員長	・今70歳過ぎまで働くわけですよ。
小川委員	・投げかけても、僕は僕の見ている社会とは違う、人種が違うとか、ランクが違う とか、いろんなその方の中で、ふるいにかけていると思うんですよ。ですから、 まだ呼びかけて住区センターとかああいうところに来られる方は少しは前向きで、 でも、そう言っている人たちを批判げに何も動かないで見ている人がたくさんいま すよね、男の方は。
石阪委員長	・そうですね。結局、住区センターに来る人はまだ。
小川委員	・どうにか手立てがあるということです。
石阪委員長	・そう。だから、問題は来ない人。
小川委員	・そう。そういう人を、女性もそうですけど。住区センターに限らず、いろんな お教室やら何やら、関心、興味を持つということをちょっと忘れかけているよう な人がゆっくりとなさっている方の中に多いんじゃないかな。
上野委員	・結構年齢行くと、だんだん行く気なくなっちゃうのよね。そういう人が多いみた いね。年とると、1年1年だんだん、私なんかもそうですけど、おっくうになる ときがある、最近。それもあから、なかなか家庭でだから男の人にも何か家庭の 仕事を与えたほうがいいんじゃないですか。お茶碗洗うとか洗濯係とか、そういう のから始まって。
小川委員	・でも、そればかりじゃ、我々だってそれだけやっていたんじゃストレスたまる じゃない。全然、だって向上性がないんだから。小学生だってやれることの部分 も多いし。そうじゃなくて、やっぱり社会で会社に入って、組織の中で活躍して きた人ほど、ある程度の力を自分で持っているんだから、それを納得させるよ うな、自分の考え方にそれがなければ無理ですけども、あっているながら、そ のまま発信できない人を刺激するような何かポーズをとって。
石阪委員長	・そうですね。それこそ今、女性活躍社会という言葉ありますけど、もっと男性 のスキルや持っているノウハウというのは、持っているはずですから、それをやっ

	り地域で活用してもらおうという、そういう宣言を足立区もしたらおもしろいですよね。
小川委員 石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですよね。</li> <li>・このままだと何か男性が本当に家の中で、亀田委員のところみたいにぼうっとして終わってってしまう。足立区の人みんなぼうっとしているじゃまずいですから、そういう意味では。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世の中の企業も、今もう70歳まで働かなきゃいけないじゃないですか、そういうあれを。だから、世の中の会社も55歳とか60歳から、定年後から働いてもらいたいって、どこも雇わなきゃいけないとか、その経験を生かしてこういうのをこういうポジションの人を雇いたいとか、何かそういうのを行政と連携してやってももらえないだろうかと思えますね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。だから、恐らく仕事だけではなくて、ボランティアでもいいし、それから社会活動でも何でもいいんですけど、活躍の場が恐らく余りよくわからないんですね。だから、住区センター行っても別に碁とか将棋でもいいんですけど、そうじゃなくてやっぱり地域の役に立つこととか、必要とされるような存在にもっとなってほしいということですよ、恐らく。</li> </ul>
亀田委員 猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なってほしいです。</li> <li>・かといってハローワークとかシニアワークへ行っても、そういう傾向での職業あっせんとか話はないんですよ。だから、単純にシニアのお仕事のあっせんになっているんですよ。</li> </ul>
石阪委員長 猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シルバー人材センターみたいな感じですかね。</li> <li>・そうなんです。だから、その講習みたいのはどこでもやっています。素晴らしいのが。でも、そこに行って聞いても、どこ行ってもやっぱり同じなんですよ。聞いたからといって、自分を活躍させられる場がどこだかがわからない。だから家に引っ込んだりとか、いいやとなっちゃうので、そこは何か企業もちょっと何割か責任を持ってもらって、うちの会社を辞めた方は、自分のルートで何かルートをつくってもらいたい。</li> </ul>
石阪委員長 猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次に繋ぐためのね。</li> <li>・そうです。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・役員だけの天下り制度じゃなくて、一般職の人という、ある程度の道が選べればね。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ちょっと自分事で申し訳ないんですけど、私が今お勤めに行っているところは、企業の定年した方が望めば、来て、ここで作業してもいいという場所、部署なんです。</li> </ul>
石阪委員長 猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それは給与は出るんですか。</li> <li>・給料は出ますけど、圧倒的に当然下がる。だけど、それまでどの役職についていたかも、ここでは全然関係ないので、パートで来た人もバイトで来た人も全部同じ仕事をさせられるわけです。すると、役職の高い仕事をしてきた人たちにしてみれば納得いかないわけですよ。でも、辞めるかそこに行くかしかなかったから来たわけで。でも、やっぱり態度は常に大きいですし、挨拶もしないみたいな人もいますし。</li> </ul>
石阪委員長 猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・管理職やっていた方だとね。</li> <li>・そう。いやいや一緒だからみたいに周りは思うし。だから、そこはちゃんとスムーズにいくようなルートづくりを、いろんな会社がすれば人材も生かせるし、安いお給料でその経験者を雇いたいところもあるじゃないですか。何かそれをハローワークとか全部でやってもらいたいなと思うんですけど。</li> </ul>



石阪委員長	・そうですね。だから、そうなってくるとやっぱりハローワークの力も必要でしょうし、それから地元の企業とか、そういう協力も必要になってきますよね。
猪野委員	・そうですね。
乾副委員長	・私は老後という言葉がすごくネガティブで、何かやっぱり老後と言われるとそう考えたくない男性が多いんじゃないかなと思うんですけどね。
小川委員	・今を生きているんですね。
乾副委員長	・そうです。
石阪委員長	・今は老人という言葉も公的には使わなくなってきましたもんね。高齢者というふうに言うようになってきたので。老後だけは残っていますね。老後どうするかみたいなね。
乾副委員長	・そうです。何か後というのが、もう先がないみたいな感じで。
小川委員	・老後っていつからですか。
石阪委員長	・一応、高齢者になるのが今のところ65歳ですから。普通は、でも定年後を指しますよね。おおよそね。
小川委員	・だから、その言葉がもう合っていないですよ。
乾副委員長	・65歳とか70歳で老後と言われると、どうなのでしょうね。
小川委員	・私、言われたくないわ。
石阪委員長	・最近、セカンドステージとかセカンドライフとかね。セカンドという言葉をよく使いますよね、最近ね。
小川委員	・そうですよね。
石阪委員長	・このあたり、ちょっと男性の意見も。
小川委員	・だから第二の人生を輝いて生きようとか、そういうような。そういうような言葉、何かあるといいですよ。
上野委員	・そういうことで、プライドが大幅に傷ついているんですね。多分ね。だから、そういう傷つかないで、自分のせっかくのキャリアをご奉仕としてどこかで気持ちよく提供できるような場所を出してあげたらいいですね。
石阪委員長	・難しいですね。よくプライドを捨てれば楽だと言いますがね。
小川委員	・そうなんですよ。
石阪委員長	・今の話、プライドですもんね。変な意味での沽券とかプライドというのにこだわっているから、何となく周りに溶けられない。
小川委員	・でも、プライドなくちゃ生きていけませんよね。
石阪委員長	・そうなんですよ。だから、そこが難しいところで。どうでしょうね。
小川委員	・プライドがあるからみんな頑張っているんですね。
石阪委員長	・あとは施策として見ると、やっぱりそういった男性の活躍の場というのはやっぱり増やしてあげないと、今やっぱりなかなかそれがありませんけど、どうでしょう。例えば男性としてどうですか。セカンドステージをもう考えられていますか。
保田委員	・幸い今ひとり暮らしじゃないですけど、もし連れ合いが先に亡くなるようなことがあって、ひとりで生活するようになって住区センターには行かないと思いますね、きっと。暮もわかりませんし、行かないと思いますね。
石阪委員長	・何をされるとかというのは、もう考えられていますか。
保田委員	・老後のためにということじゃなくて、何か地域だとかそういうものに貢献できるというのと思って、今、日本語教育のボランティアをやっています。夜間ですけども、そういうものが、自分が今の立場で働かなくてもいい環境が整ったときには、もう少し比率を増やしたりだとかというふうには、男女共同参画とは余り関係ないんですけど、やはり日本語がたどたどしい外国人の方、足立区もかなり増えてきていますので、そういうことというより、老後のためにというよりも、今仕事しながら何

石坂委員長	かできることないかなと思って、そんなことをしていますね。
保田委員	・恐らく、だからそれが大事なんです。働いているうちからじゃないと、先ほど話があったように、終わってから考えるとなかなか難しいので、今、だから並行されているわけですね。そういうお仕事とボランティアとをね。
石坂委員長	・そうですね。やはり皆さんのご意見を伺っていて、私自身も反省しなくちゃいけないですけど、もっと経営者がしっかりしなきゃだめですね。
保田委員	・それはそうなんですが。
保田委員	・企業の。男女共同参画にしてもそうですし、皆さんのお話を伺っていてもそうですし、やはり経営者がどういうビジョンを持って、自分の会社とかをどういうふうにしていきたいかというのを、もうちょっと真剣に考えないと変わらないと思いません、そういう働く場というのは。
石坂委員長	・よく企業さんでボランティア休暇を認めたりとか、あるいは積極的にそのCSRの活動で、社会貢献を企業として例えばいろんな子供たちのところに行ったりとかするような企業も最近増えていますけど。
保田委員	・うちの会社でもボランティア休暇だとか、そういったものは設けていますので、台風で今回被害があったところなんか、有休でもなく特別出勤扱いで行ったりしている社員さんも何名かいますけどもね。皆さんのご意見を伺っていると、将来どうするかと自分のことを考えるよりも、今どうするかということを考えて、できることからどんどんやっていかなきゃいけないなというふうには感じますよね。
保田委員	・あとは、足立区はせっかく大学をたくさん誘致してきているので、セカンドステージの公開講座だとか、ああいったものやっぺらっぺらするのはちょっと存じ上げていますけれども、例えば埼玉県草加市にある獨協大学だとか、ああいうところはかなりそこら辺、講座も充実していますし、通ってきていらっしゃる方も多いため、今度、文教大学も来るわけですし、それぞれの地域にそれぞれ大学が、千住地域は電機大とか、向こうは文教大とかという中で、もうちょっと学ぶ場の選択肢を多くしてもらおうということ。
石坂委員長	・そうですね。いわゆるリカレントって、学び直しということですけど、大学もちょっとその辺、協力いただきたいところありますね。18歳人口減っていく中で、むしろリタイアされた方を新たな、大学から見ると顧客として受け入れて、一緒に例えば地域の活動をしてみたりとか、勉強してみたりというのはやっぱり必要ですか。足立区の場合はそれできますもんね。
保田委員	・そうですね。
石坂委員長	・いろいろバリエーションがあるんでね、大学それぞれ違うんで。
保田委員	・環境は整っていますし、ちょっとあれですけど、葛飾区と提携して、そうすると東京理科大なんかもありますので、少しそこら辺で共通で葛飾区の方は足立区にも来られるし、足立区から葛飾区にも行けるしというところで、学び場を多くするとか、少しやはりいろいろ条件はあるんでしょうけど、学ぶことについて若干補助が出るだとか、そのことをまた考えていただけるといいんじゃないかと思えますけどね。
石坂委員長	・そういう意味では、最近キャンパスの中で結構高齢の方も見ますので、よくよく聞くと、二十歳の子と一緒に飲み会とかやっていますし、多分楽しいんじゃないかと思うんですね、またそれはそれで。だから、そういうこともあり得ますし、また新たな自分の方向性というのを定めることもできるのかな。
保田委員	・ほかどうでしょう。皆さん、ご提案、この部分、何か。野田委員、どうですか。なかなか男性が出てこないという。
野田委員	・高齢の方というのはなかなか外に出られない方が多いみたいですが、最近の若い

	<p>方たち、40代の男性たちは、割とイクメンとかいう言葉がはやったり、ワーク・ライフ・バランスなのか、子どもの学校などにお父さんグループというのがたくさんあるように聞いています。そこでいろんな活動をしているというので、世の中変わってきているんだなと思いました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢の方に今すぐそういうふう意識を改革しようというのは難しいと思うのですが、私の父のケースでいくと、正式名称はわかりませんが、シルバー大学というところに定年後に通いまして、半分公（おおやけ）なんですかね、コース別に20～30人くらいのクラスになっていて講義を受けるというようなものようですが、そこでボランティアの話が出てきたり、サークルに入って活動したりしていました。</li> <li>・それまで全然会社以外では周りとの付き合いがなかった父なんですけれども、どんどん出かけて行って。男性はやはりプライドが高いので、地域の住区センターに自分から出向いていくというより、学校のようなところで講義を受ける感じのほうが参加しやすいかも。</li> </ul>
石阪委員長 野田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういうネットワークができてきてと。</li> <li>・そうですね。すごく広がっていったので、プライドを保ちつつみたいな、そういう何かがあれば。なので、先ほど言われた足立区内の大学と協力して何か、というのもひとつの手なのかなと思いました。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恐らくそれは行政が作った、主導している大学ですね。いわゆる本当の大学ではなくて、よくある寿大学とかシルバー大学ってありますよね、自治体が動いて。ここはありましたっけ、その形態は。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ないですよ、今ね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何とか大学ってないですね。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はい。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自治体によっては結構盛んにやっているところもあって。</li> </ul>
内藤委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・千葉県の柏市のあたりなんですけれども、あの辺でやっているのが、こういうのがあるんだなと思って。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あの近くの川口市、埼玉県の川口市でも50歳以上限定の大学というのがあるんですよ。だから、そう考えると、年配の方を集めてネットワークをつくるために大学を行政が主導してつくるというやり方も1つあり得るということですね。</li> <li>・ほかはどうでしょう、この問題。なかなか難しいかな。学校と連携するというのが一番僕は早いんじゃないかなと思うんですけど、大学があるのでね。</li> <li>・岩崎委員、どう思います、この問題。男性がなかなか。でも、イクメンネットワークみたいなのはやっぱりあるんですか。何だろう。お父さん同士のつながりとかというのは。</li> </ul>
岩崎委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校のほうでは、おやじ会とかというので、地域のお父さんたちが繋がるというものもあるんですけど、でも、やっぱり出てこない人は出てこないです。一部の方が。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もう一部の方でやっているんですね。おやじ会を運営している。</li> </ul>
岩崎委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうなんです。それがもう小学校からずっと続いたまま中学校まで来ているという感じですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あと保護者会とか、そういうのはどうですか。やっぱり男性の参加って圧倒的に少ない。</li> </ul>
岩崎委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最近、増えてきています。PTAの活動のほうにも男性が出てきてくれたりしてくれているんですけど、私としては、父子家庭のお父さんにも出てきてほしいと思って声はかけるんですけど、やはりそういうお父さんは出てこないですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり、なかなか声がけしても難しいということですね。そうすると。</li> </ul>

岩崎委員	・そうですね。難しいですね。
石坂委員長	・数としては、でも圧倒的にやっぱり女性のほうが多いんですか、今でも。
岩崎委員	・圧倒的に多いです。
石坂委員長	・あそこも難しいですね。PTAの世界というのも、男性が結構入っていくのはかなり勇気がいるというか、入りづらいとよく言いますよね。
岩崎委員	・入りづらいみたいです。女性が多いので。会長とかは男性が多いんですけど。
石坂委員長	・そこは昔からやっぱり男性が会長になると。
岩崎委員	・はい、男性のほうが多いです。
石坂委員長	・だけど、活動しているスタッフはみんなほとんど女性と。
岩崎委員	・女性です。
石坂委員長	・どうですか、このあたりは。田中委員にも聞いてみたい。
田中委員	・今こうやって見回していると、若い方が多いのと思ってはいたんですけども、私一度退職をして、それで思ったことがいっぱいあるんですが、今男性が、しっかり仕事を終えるまで勤めると、その仕事をしている間って、ほかのことを考える余裕もなければ時間もない。そうすると、退職すると一体何があるかなというのは、別に男性に限らず、女性もこれから出てくると思うんですね。
石坂委員長	・これから大いに出てくると思いますね。
田中委員	・例えば、私なんかは、退職したときに、町会の仕事をしたいと思ったわけです。町会に長く住んでいて、何も今まで貢献してこなかったから。だけれども、いざ町会に入ろうと思うと、どこへどう声をかけて入っていいかわからないわけですね。きっかけがない。それはきっと男性なんか、もっとそうなんだろうなという。だから、新たな世界に飛び込むのに、じゃ、準備をしていけば飛び込めるかという、そんなこともないだろうなという。だから、何か制度とかそういうものでこういう意識というのは変わってくるのではなくて、やっぱりこれが女性も男性も本当に共同参画社会になってくると、男性だけの問題ではないような気がするんですね。
石坂委員長	・そうですね。恐らくもう間もなく女性も同じような課題を抱えて。
田中委員	・はい。私の場合は、受け皿として、退職しても仕事があったので、今でも続けているんですけども、そういう制度があるのは、例えば私は教員だったので、今若手教員の育成のためのお仕事をしている。それは、じゃ、どこの区にもあるかという足立区だけなんです。これは他区の人たちからはすごくうらやましがられるし、若い先生って何年を指すかという、教員になって5年目ぐらいまでを指すんですけども、その先生たちが、3月まで大学生だった人が4月から教員としてやるのに、素人が子どもの前に立つのと同じなことです。それを指導していく。それで少しでも早く成長してもらいたいという手助けをしているんですけども、それは自分が新しくやってきたことではなく、今までやってきたことを生かせることなので、余り抵抗なくできるし、生きがいも感じているので、やれるわけなんです。そうすると、もういいかな、辞めようかなといったときに、その仲間は何を言うかと。じゃ、辞めて何するのと必ず言うわけですね。じゃ、辞めて何をするか決めないと辞められないのかなって、今2度目の退職をどこで持ってこうかなと思うところがあるんです。
石坂委員長	・あともう一つは、先ほど住区センターに出ないというお話もあったんですけど、びっくりしたのは、図書館に行くことひとりの、ほとんど男性なんですけど、男性の人が新聞、雑誌を大体開館と同時に持って行って。
田中委員	・もう、開くのを待って。
田中委員	・はい、閲覧室で日がなずっと。飲食はだめだから、多分一度帰られるのか何かわからないけど、結構な長い時間いらっしゃる。

石坂委員長	・でも、図書館だとしゃべれないですよ、当然ながら。
田中委員	・しゃべれないんですけど、ひとりで新聞か雑誌を。
石坂委員長	・要するに、黙読しているわけですね。ずっと雑誌を。
田中委員	・ほぼ全部ありますので。そういう姿を見かけたり、あとはショッピングセンターのベンチのところにいらっしゃる人はよく見かけますね。
石坂委員長	・それは何されているんですか。
田中委員	・座っているだけです。人を見ているというか。
石坂委員長	・人を見ているんですか。
田中委員	・はい。だから、いずれ何もすることなかったら、私もああいう道なのかなと思うときがあります。ですから何か、行政が何かするとか、会社が何かするというよりも、やっぱり退職するまで、退職した後のことはなかなか考えられないんじゃないかなというのは思うんですね。
石坂委員長	・一方だね。
田中委員	・うん。立場が重くなればなるほど、そんなことまで、そんなことって変な言い方ですけど。
石坂委員長	・今がもう精一杯だね。
田中委員	・はい、そうですね。今は気が回らないのでと思いました、ちょっと。
内藤委員	・田中委員が町会の仕事をやろうというふうに思ったきっかけは何ですか。
田中委員	・やっぱり学校はいろんな町会とかかわるので、私のスキルが役に立つに違いないと思ったわけです。
内藤委員	・じゃ、仕事をされている間に町会の存在を知り、そこで自分の才能が生かせるんじゃないかと思ったということですね。
田中委員	・そうですね。それはすごくたくさんの町会と関わりを持ったので。
内藤委員	・仕事をしている間に何か自分の次の道が見えていることが必要でしょうね。
田中委員	・そうです。
石坂委員長	・恐らく定年とかりタイアというところの少し前に、やっぱり考えますよね。考えるといえば考える。ただ、それを、例えば行政のサービスに乗っかるかどうかというのは、またちょっと人によって違うと思うんですね。恐らく自分で探される方が多分多いと思うんですけど、ただ、なかなか今きっかけを持ってないという方も一方でいて、そういう方が恐らくひとりでやることないと図書館とショッピングセンターに行くんですかね。よくわからないけど。それがあるいは好きでやっているのかもしれないですけど。
小川委員	・図書館は男臭いんじゃないかと、もっと私も、もう来るの止めようと思った体験がありました。図書館、近くの伊興図書館へ行っただけですけど、全部男性で、それもただ暗くて。
石坂委員長	・でも、本を読むところですから、それは。
小川委員	・それでいいんですけども、その匂いがおじさん臭い。ああ嫌だと思ってもう、すぐ帰りました。
乾副委員長	・加齢臭ですか。
小川委員	・だから、やっぱりそのこもっちゃう、その意識が、匂いがじゃなくて、彼らの持っているその意識がずっと漂っているんですよ。そこに行って、先に立つようなものを見て、これを僕はやりたいなとか、こういう道もあるんだと違って次に結びつけるような発想で行っていないから、ただ時間と場所を提供してくれるところを、そこにひたすら座ってあるものを漁ってという感じで。だから、ちょっと次元が違いますよね。また、そういう方とは。求めてはいないと思うんですよ。
石坂委員長	・図書館の例えば入館者の調査とかしてみたらおもしろいんですね。実際、圧倒的に

	<p>高齢化が進んで、しかも男性の利用者がすごい増えているとか。</p>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・50%はそういう方です。</li> </ul>
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恐らく今。余り自習とかでは使えないんですけど、子供たちは。勉強とかしちやいけない。</li> </ul>
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういう部屋もあります。学習室みたいな。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あるんですか。あとは何か子供、親子のイメージが非常に図書館という強いんですけど、そういう子よりは今はむしろ年配の男性が多いというね。でも、これは一応役割は果たしていますよね。区としてはね。そういった人たちの受け皿にはなっているということで。僕はまだ、図書館に行く人はいいと思っているんですよ。まだまだ外に出ようという。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うちから一歩出られる勇気を持っていらっしゃる方は、まだ何にかけても……</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恐らく家でテレビ観たりネットやったりしているというのが、恐らく孤立化していく1つの要因でもあるので、亀田委員、そうですね。図書館に行ってくればそれはそれで。</li> </ul>
亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、うちも正直、大学行っていたんですよ。その高齢者の方の市民大学って、佐倉はそういう名前なんですけど、びっくりしちゃうことに全部の講義受けちゃうんです。何か1個とかでお友達つくればいいのに、自分のプライドがやっぱりなかなか人を寄せつけないものだから。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・じゃ、例えば大学に行ってもお話をするわけではなくて、講義を聞いて帰ってくるという。</li> </ul>
亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・10個ぐらい講義があったら、半年か1年のサイクルなのに、全部受けちゃうんです。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の好きなものだけを取るんじゃないでね。</li> </ul>
亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何年もかけて。本当に何か勉強するのか、時間潰しするのか。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、真面目な方ですね。何か行ったら講座を受けなきゃいけないという。</li> </ul>
亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ただ、本当にがむしゃらに働いてきた年代の人なので、本当に真面目なんだと思うんですよ。しかも、ボランティアもやっていたんですよ。老人ホームに行って、ハーモニカとか吹いていたんですけど、やっぱりそれも自分の自己満足でしか、父の場合はなかったの、何かそこで自分の次の道を探すとかではなくて、何か違うんですよ、やっぱり。だから、私が思うのは本当にもっと社会人であるうちに、自分の人生というものをきちんと考える時間を、もちろんお仕事も一生懸命やってくださった方だからこそ、会社はそういう人を輩出しちゃうんですよというのを、会社にもちゃんと説明を行政のほうからしたら、会社もそういうお金にならないことはしたがるんじゃないと思うので、多分一銭の得にもならないじゃないですか、会社としたら。でも……</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。次のステージのことは会社は別に。</li> </ul>
亀田委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、そういう人を輩出しちゃうというこの長い人生100年と考えたときには、やっぱりそういう人を輩出しちゃうから、これもやっぱり義務として会社の中で、今まで働いてもらったからには、これだけのことという、そういう。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。僕は会社がやっぱり社会貢献これからしていかなきゃいけないと、恐らくどの会社も持っていると思うんですけど、その中にある意味でうまく埋め込んで、地域とかそういういろんなところとつながるような仕組みをやっていかないと、やっぱり利益追求していても、会社もそういう時代じゃ今もうないですから、そうですね、それは確かに必要かもしれないですね。そういう話って余り多分、男女共同参画も含めて、足立区の中でしてきたことはないと思うんですよ。僕もいる</li> </ul>

	<p>んなところに顔出していますけど、セカンドステージについてここまで議論をするというのは、なかなかないですね、余りね。部局もないですよ。セカンドステージに向けて何か。担当部局って、どこになるんだろう。高齢者でもないし、キャリア、仕事でもないんでね。</p>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢とかになるのかもしれないけれども。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢化に向けてということですよ。あるいはここかもしれないですね。場合によってはね。いわゆる市民活動や地域と連動するという。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうです、地域のちから推進部ですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域のちから推進部かもしれないですね。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・力になっていただきたいですよ。せっかくキャリアを積んできた方たち。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・足立区だからこそできる、何かそういう取り組みがありそうな気がしますよね。大企業ばかりでもないし。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・足立区はもともと孤立ゼロプロジェクトをされているので、結局その次のステージとして、孤立ゼロじゃなくなるということは、今度は社会と繋いでいくわけですよ。それをもうちょっと早めてやってもいいですし、もっと何か地域だけじゃなくて企業とも連携しながらやっていくということもありかもしれないですよ。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1つは多分シルバー人材センターとかがそういう役割の人なんだろうけど、行かない人は当然そこも登録しないですし、多分、人数はすごい登録者いるんですよ。その割にそこまでのお仕事はない。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恐らくシルバーはそうでしょうね。登録者は多くて、やる仕事はかなり単純作業が多分多いと思うんですよ。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だから、それ嫌な方もいっぱいいらっしゃるし、そこを何か企業とまた繋ぎかえるとかしていったら。もったいないと思いますよね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まだまだ働けるのに。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・皆さんのお話をまとめると、基本的にはやっぱり能力を地域のために有効に活用してもらおう。これは男性も女性も変わらずに、せっかく持っているその人のノウハウをどうやって地域に振り向けるかということ、やっぱり行政としても何らかの手を打つべきだし、「皆援隊」とかありましたけど、あれはもうないんですけど。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「皆援隊講座」自体は残っています。ただ、NPO団体とかを紹介するような形で、そこに繋がっていきけるような、そういう形で皆援隊講座は残っています。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・じゃ、いわゆるさっき言ったシルバーとか寿ということではない。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ないですね。そこの世代に限定しているわけじゃなくて、広く区民活動としての。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もともとは何か世代限定していませんでしたっけ、あそこは。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もともとは、はい、そうです。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何かシニアみたいな感じでしたよね。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シニア層のというところで始まっていますけれども、今ちょっとそれから世代を広げて、幅広く区民活動を広げていく上ではという視点になっています。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうすると、さっき言ったプライドが邪魔してなかなか難しいとかいう話に。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あとNPOがあるんですけど、若い人が多いですよ。NPO活動して。もうちょっと年齢の高い方のNPO団体があってもいいですよ。社会貢献していく。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういうところもありますけれども。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少ないですよ。まだ。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPOにまだ慣れないというか、知らない。そういう知らない層が多いんですかね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恐らくNPOがまだそこまでご年配の方に身近じゃないから、恐らく足立区のN</li> </ul>

	P Oって、別に法人格は関係ないですよ。
寺島課長	・関係ないです。
石阪委員長	・いわゆる任意団体で構わないという。
寺島課長	・極端な話、3人集まって何かやればいいので。
石阪委員長	・やれば一応いいんですけど、その辺の情報を多分よくわかっていないですね。センターに登録すれば利用できるわけですもんね。だから、本当はそういう仕組みを、例えばもうちょっと若いころからいろいろやって、例えば今、足立区で、実際に子ども食堂なんかは今すごい人気というのも変ですけど、いろんなところでやっていますけど、あれはほとんど女性なんですよ。だから、ああいうところに男性がかかわるような仕掛けがあっても多分。ただ、嫌かな。やっぱりちょっと男性が子ども食堂。どう。ありますか、地域に子ども食堂って。
岩崎委員	・あります。
石阪委員長	・男性はスタッフにいますか。
岩崎委員	・さっきも話出てきたと思うんですけど、やっぱりそれは固定観念かなと。男性が料理をして、それを、その男性が作ったものを食べるのがちょっとと思うのは、やっぱり固定観念で、もっとどんどん出てきてもらえば。実際シェフとかって、男性が多いわけじゃないですか。
石阪委員長	・そうですね。
岩崎委員	・うちの父親も料理人だったんですけど、何で女性がお寿司とかの職人が少ないかという、やっぱり体温が高いからと言われたんですけど、でも、実際、今では女性もすごく多くて、なので、そういう場にも男性はもっと出てきていただければいいんじゃないかと思うんですけど。
石阪委員長	・そうですね。男性募集って書けばいいですね。子ども食堂ね。男性スタッフ募集って書けば多分来てくれるし、子ども好きの人も多分いると思うんですよ。調理だけじゃなくてね。コミュニケーションも取ってもらってとか。
岩崎委員	・例えば、塾みたいな感じで、子どもたちに、大学出ていらっしゃるんでしたら勉強とか小学生とかに教えていただけたらとか、そういう場を作っていただければ。
石阪委員長	・そうか、それだったら。
猪野委員	・そういう人がいてくれたらいいなと探しているところはいっぱいありますよね。
石阪委員長	・うちの学生もボランティアに行かせていますけど、そこに男性が入ってもらえるという。
岩崎委員	・はい。
猪野委員	・子ども食堂も月に1回とか限られた回数しかできないですけど、例えば、そのリタイアした方でボランティアしたいという方であれば、そういう方が集まれば、もっと頻度を増やせるので、みんなが助かっていくんですよ。そこでそういう勉強を見てあげたり、あるいは遊びを教えたりみたくなっていけば、地域でやっぱり子供を育てたりお年寄りを見たりできるので、そこに貢献できると思うんですけど。
石阪委員長	・そう、遊びとか勉強とかを教えるというところ、教えるというのは多分嫌いじゃないですよ。
猪野委員	・ですよ。
小川委員	・ただし、年齢的に旗を自分で掲げて基盤を作る、この活力が、もう自分で意識していると思うんですけど、もう下がってきているんですよ。だから頭の中で、してもいいけど、自分で旗を、のろしを揚げるのはちょっときついかと。
石阪委員長	・なかなか一歩が踏み出せないという感じですね。だから、それがハードルになっちゃっているんですよ。
小川委員	・そこがネックになって、わかってはいるけどできないって、留まっていらっしゃ



	<p>る方もいるんじゃないでしょうかね。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・逆に、そこは若い人は旗揚げる人は、旗を揚げる人はいっぱいいると思うんです。</li> <li>・ですから、40代、50代の方がばんばん旗揚げしているのはそこなんですよ。体力があるから、頑張れるから。</li> </ul>
猪野委員 小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だけど、常には活動できないとか、やっぱり仕事があるとか、家族の面倒を見るとなるんで、そこを補ってもらえたら。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども食堂と学習支援と一緒にやれたらいいですよ。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。学習支援も今やっていますよね。何カ所か拠点で。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食の提供も行っていきます。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっているの、そういうところのスタッフは、今若い方がほとんどですよ。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例えば、ボランティアの学生だったり、NPOが多分委託して。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPOのスタッフも、やっぱり若い方多いですね。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余り僕も年配の方見かけたことないから。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO活動支援センターで、夕方から学校が終わった後から面倒見てというのがあるんですけど、そこはやっぱりちょっと年配の女性の方がひとりで教えて、中学生ぐらいまでのお子さんを10人ぐらい。やっぱり人手、ほかにも手伝ってくれる人がいたらとはおっしゃっていましたが、なかなか。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それから夜の時間帯は、だめなんですかね。どうなんだろう。もう眠くなっちゃうとかそういうことはない。何か子どもたちに合わせると遅いじゃないですか、時間が、どうしても5時ぐらいからスタートして。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、せいぜい8時ぐらいだから、そんなことはないと思いますけど。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大丈夫か。そうか。やっぱり午前中、さっき図書館に行く人がいっぱいいるという、活動時間帯としてはやっぱり前を何とかしてあげたいなというような午前中をね。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早く起きないです。夜更かししなさいって訓練をする。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼寝してね。でも、自分が活躍できる場があれば、そこにスライドして何かできるんじゃないかね。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人のために役に立つというのは、すごく生きがいになりますよね。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・恐らく足立区はそれを目指しているんですよ。行政が何でもやるのではなくて、それこそ「協創」ってそういう理念で成り立っているわけですから。やっぱりその地域でいろんな活躍できる人材がいれば、それをうまく社会課題の解決に持っていくという。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結びつかないです。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・結びつけがうまくいっていない。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コーディネーターをするのは行政の仕事かなと思っていますけど。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・だから、その辺をちょっと行政には、今まで以上にちょっと力を入れていただいて、地域の人材の有効活用というのをぜひ、これは男性、女性拘らずにやっていただき、特にリタイアしたセカンドステージを充実させるためにも。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・老後でなくね。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうそう、セカンドステージね。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ええ、そうしましょう。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほか、何かありますか、これについては。また、次回もちょっとありますけれども、一応、最後のテーマも少し触れておきたいと思いますので、次回いらっしやらない方もいると思いますから。</li> <li>・最後、親子支援課のほうからお話があった、貧困の連鎖の回避のためのひとり親</li> </ul>

	<p>家庭への支援ということで、母子家庭の正規雇用が足立区は低いというようなデータもここにもちょっと書いてあって、相談相手が母子家庭の場合は2割、父子家庭の場合は4割が相談相手がいないというような、前回かなりデータも細かくいただいたんですけれども、足立区の1つの課題でもあります、このひとり親家庭ですが、これについては皆さん、どうでしょう。もし提言、あるいは皆さんのご意見があれば伺いたいと思うんですが。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まず、相談できる人がいないというのがかなり多いのかな。やっぱり孤立化しているというのは1つ大きな問題で、そのやっぱり悩みの大きなところが、老後のことや生活費が足りないとか就労の問題、これがやっぱり非常に大きいということもあります。やっぱり経済的な問題がかなり大きいですかね。</li> <li>・これはどうですか、岩崎委員、例えば母子家庭、多分、父子家庭もいらっしゃると思うんですが、やっぱり課題というのはどういうところにあるでしょう。やっぱりネットワークの中に入ってこないとか、相談相手がいない。</li> </ul>
岩崎委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いえ、一応、この家庭は父子家庭です、この家庭は母子家庭ですという情報はひそかに入ってくるんです。PTAの本部のほうには入ってくるんです。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・密かに入ってくるんですか。</li> </ul>
岩崎委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・密かに入ってくるんです。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうなんです。</li> </ul>
岩崎委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余り大々的には入ってこないんですけど、入ってくるんで、一応、その対応は考えて、PTAの活動のお手伝いだとか、お父さんひとりだとお手伝いは厳しいのかなとか。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例えば負担を軽減してあげるとか、そういうことですかね。</li> </ul>
岩崎委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね、はい。うちの学校は少人数なので、委員さん、全員がPTAの役員になるという形になっているんです。一部だけではなくて全員で活動しましょうという話を入学のときからしているんですけども、そのときに何委員と決めていく。入学式に決めるんです。そのときにやっぱり、あそこはお父さんだけとか、あそこはお母さんだけだから昼も夜も働いているからという情報は入ってきて、それに応じて対応はさせてもらっています。無理に絶対この委員でこの日出てきてくださいというのは、絶対そういうことは言えないので、一応ボランティアなので。</li> <li>・でも、そういう家庭をじゃ、ほっといていいのかというと、そうではなくて、子どもにも問題が出てきたりはするので、貧困だったりとか、そういうのもあるので、一応、副校長と話をしながら、そういう家庭にはちょっとお母さんに声かけたり、お父さんにも運動会でちょっと声をかけたりということはしているんですけども、やっぱり閉ざされる人は、話しかけても余り反応してくれなくて。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これも見るとかなりそういった孤立、まさにこれも孤立しているという状態で、なかなかうまく地域でネットワークを築けていない母子・父子世帯が、特に父子世帯はかなり多いんですけど、これも1つ問題ですし、あとはやっぱりどうですか、問題というところやっぱり仕事の問題になるのかな。特に課題はやっぱり母子世帯の非正規雇用が62.5%、簡単に言うと、正規雇用になかなか就けないと。これは石川委員、やっぱりそうなんですか。これはかなり大きいですよ。</li> </ul>
石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マザーズハローワークのほうに登録してくる方のうち、約15%ぐらいがひとり親世帯の方なんですけれども、そのうち就職が決まっている方は18%ぐらい、そのぐらいは毎月就職決まるんですが、5割以上がパート待遇での就労が決定している。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それは正社員を希望していても、やっぱりパートにしか。</li> </ul>
石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いや、子育て世代は、やはり保育園が開いている時間。</li> </ul>

<p>石坂委員長 石川委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもをもう迎えに行かなきゃいけないと。</li> <li>・子どもを預ける時間に合わせて働くということがどうしても出てくるので、パートで時間を限定をして働くという方が多いですかね。年齢が上がってきた、子育てがある程度一段落している40代ぐらいの方のひとり親の方については、フルタイムで勤務を希望する方も多くはすし、そのための就職をしていますけれども、やはり30代ぐらいまでの、まだお子さんが小さくて働くというふうになりますと、ひとり親なので、どうしても保育園がやっているところ、保育が確保できている時間帯でしか働けないのでというところが一番課題なんじゃないかと思います。</li> </ul>
<p>石坂委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうすると、それがここにもあるとおり、前回の資料では収入にも直結していて、非常に所得がやっぱり低いわけですよ。これが結局、足立区のいう負のスパイラルというか、結果的にはなかなかそういうもので貧困がその次の世代まで定着していく。特にこれが子どもの就学にも関わってくるとなると、だから、かなり難しい問題なんですよ、足立区の場合はね。</li> <li>・このひとり親家庭をどうやって支援していくのか。恐らく区としてもいろいろされていますよね。前回の話でいうと、さまざまな資料をもらいましたが、やってはいるんですけども、特に相談なんかはかなり600件以上で、半分が就労や資格に関すること。それからあとは講座ですかね。サロン豆の木。豆の木でしたっけ。これはひとり親家庭向けのいわゆる講座なんですけれども、これをかなり開催しているというような情報もいただきました。あとはさまざまな給付金だったりとか、プログラムもあって、パソコン講習だとか仕事・資格の説明会、それからライフプランセミナー、諸々あるんですけど、足立区としては多分できることを一通り全部網羅的にやってはいるんですけども、恐らくこの問題というのはかなり難しい問題だと思うんですよ。</li> <li>・いかがでしょう。何かもし皆さんの中でこういったことをしてはどうだろうかとか、こんなような取り組みが必要なんじゃないかということがあったら、いただきたいと思うんですけども。</li> <li>・ただ、足立区はほかの自治体に比べるとかなり熱心にやっているほうだと思うんですよ。就学支援についても、子どものさまざまな支援もしていますし、親向けの支援もかなり足立区はやっているほうですよ、かなりね。</li> </ul>
<p>寺島課長 石坂委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうだと思いますね。</li> <li>・この部分は。だから、逆に言えば足立区の一応売りでもあるんですよ、ここはね。</li> </ul>
<p>寺島課長 石坂委員長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回、資料や冊子を担当課のほうで用意していますけれども、そんな形でいろんなサービスを網羅してやっていますということで、ご紹介させていただきました。</li> <li>・これを見たときに、逆に言うと、課題よりもむしろこれだけサービスをやっているんで、足立区のこういった部分はむしろPRできるぐらいかなというふうに思ったんですけど。</li> </ul>
<p>徳永委員 石坂委員長 徳永委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あと、皆さん何かありますか。実際に課題。この問題ですけども。</li> <li>・これは徳永委員とかに聞いたほうがいいかな。ひとり親、例えば離婚したりとかした後に、実際に例えば女性でも男性でも一番大きな抱える問題という、やっぱり経済的な問題。</li> <li>・経済的な問題だと思います。</li> <li>・それはやっぱり就労がなかなかしづらいという。さっき言ったように。</li> <li>・しづらいということはないんでしょうけど、非正規が多いという話で、石坂委員長のお話を聞いているとやっぱり多いかな。時間、だから自分が働いている間、誰が面倒を見るんだというところにまだ課題が残っているんじゃないかと思いまし</li> </ul>

	たけれども。
石坂委員長 石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱりそこですね。</li> <li>・窓口で相談をされていて、全員ということでもないんですが、児童扶養手当を受けていらっしゃる方の支給要件というのが多分、収入によって制限があって、そこをどうしようかという相談って結構多いんですよ。</li> </ul>
石坂委員長 石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・つまり、その限度を超えてしまうと手当が出なくなる。</li> <li>・出なくなる。なので、そこまで働こうか、それとももっとステップアップして収入を得てということを考えるかという、どうしようかなという相談は結構窓口では多いんですね。</li> </ul>
石坂委員長 石川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これは難しい問題ですね。支援をするのはいいんですけど、やっぱりある程度限度があって、それを超えてしまうと、むしろマイナスになってしまうということかな。手当がもらえなくなるんでね。</li> <li>・そうですね。負担が大きくなってしまいうという、本当にもうフルタイムでずっと働いて正規雇用でとって安定している方は手当も受けていないかとは思いますが、それなりに基盤ができています。だけど、突然ひとり親になってしまった。これから生活をしなくちゃいけないといったときに、就労ができる、それだけの最初のスキルというのが必ずしもあるとは言えないので、ブランクがあったりとかすると、社会復帰するのに結構大変だったりとかするので、その辺、手当を受けて、支援も受けながら働きたいとなると、就労の時間をあえてセーブしようかなという方も中にはいるかなという感じですね。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・難しいですね。だから、そうなってくるとね。一概にどっちがいいとは当然言えないわけで、ケース・バイ・ケースで対応しなきゃいけないということも。</li> <li>・そうすると、単純に支援ありきではまずなくて、やっぱり就労に向けて本当は動かす、支援がないほうがいいわけですね、本当は行政からすれば。ちゃんとフルタイムで働いてもらったほうがいいんでしょうけど、現実にはそうではなくて、恐らく何かこういう議論の中では、みんなをどっちかというところと正社員化して、かつ保育も充実させてというのが理想だと思うんですけど、現実ではそのあたりは実際どうなんだろうかな。支援のためにセーブするというようなことも現実的にはあり得るということですね。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どうなんですかね。保育園自体は今整備がかなり進んできていて、来年度には待機児ゼロを目指すという形で今どんどん進めてきていますので。</li> </ul>
石坂委員長 寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ちなみに今足立区はどれぐらいなんですか。待機児童。</li> <li>・百数十名だったかと思えますね。それについては、2020年には解消するというような一応計画にはなっていますし、フルタイムで勤務されている方については、少なくとも全部拾ってこうというような形では今、動いているところですね。</li> </ul>
石坂委員長 徳永委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。</li> <li>・ほかいかがでしょうか。例えば、母子世帯、母子家庭、父子、父子家庭について。</li> <li>・せっかく働き始めても、健康の問題ですぐ辞められちゃう方とかが、体感的に僕が手がけた方とか多い印象があります。</li> </ul>
石坂委員長 徳永委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・せっかく仕事には就いたけれども、続けられなくなってしまつて。</li> <li>・そうですね。体力的な問題とか、精神的に不安になっちゃって、それなりの病名がつくことも多くてなかなかやっぱり、せっかく働き始めても辞めちゃうし、ましてや正規雇用でずっと続ける前提でなかなか仕事を選ぶこともできないという方もそこそこいたような感じもしますね。そういう問題もあるのかもしれないですね。</li> </ul>
石坂委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。続けられなくなってしまったときに。</li> </ul>

岩崎委員	・実際、8時間仕事をして、子育てもして、家のこともしてとなると、すごく大変なことだと思います。それが丸々5日間で、あと2日休んだとしても、その休みが本当に休みなのかというと、そこで溜まっている家のことを、平日できない家のことをそこでばっとやっちゃうと、丸々365日休みがない状態のお父さん、お母さんが。
石阪委員長	・そうですね。
岩崎委員	・うん。それで子どもが例えばインフルエンザになりました。子どもは休みにはならないんですよ。インフルエンザの場合、診断書が出れば。
石阪委員長	・学校は出席停止ですね。
岩崎委員	・学校はそうなんですけども、親は行っちゃいけないじゃないですか、子どもが。
石阪委員長	・そうかそうか、そういう問題ね。
岩崎委員	・そうなんです。そういう問題もいろいろあつたりすると、やっぱり正社員で働くのが難しくなる。
石阪委員長	・そうか。もし休むとすると有給休暇を取って、その間休むような形ですね。
岩崎委員	・あればです。あればですね。
石阪委員長	・恐らく、ひとり親の親が働く労働環境が、なかなか今の日本だと整備されていないということなのかな。どうなんでしょう、会社側もやっぱり理解はその辺はなかなか難しいんですかね。
岩崎委員	・難しいですね。
石阪委員長	・今言ったように何か、負担をシェアするような仕組みってないんですかね。例えば、ひとりで今、全部抱えているわけですよ。
岩崎委員	・そうですね。
石阪委員長	・子育てやって、仕事やって、収入も得てという、それを例えば、子育ての部分でみんなでシェアというか、例えば一緒にご飯を食べさせてくれるとか、そういうのは難しいかな。
岩崎委員	・厳しいですね。
上野委員	・それほど親しくないよね。
石阪委員長	・海外は結構あるんですよ。そういう何かシェアをする仕組みを自治体が結構作っていて、みんなでその負担をシェアすれば、ある意味では仕事というのに集中できる時間帯とか作れるというやり方なんですけれども。
岩崎委員	・やっぱり、そこは他人に頼むというのは難しいですね。
石阪委員長	・日本はどうしても頼めないし、家庭で子どもを育てるとというのが日本のある種文化でもあるので、その辺が、なかなか。これをだからどうするかですね。
猪野委員	・もう少しそうなるといいとか、やっぱりひとりって大変ですよ、本当に。
岩崎委員	・大変ですよ。ストレスも溜まるのでね。
猪野委員	・本当にそう。毎日必死でやらなくちゃいけないから、気も緩まないし、何か1つ起きたら、そこでばっと躓きますもんね。
岩崎委員	・そうですね。
猪野委員	・最終的に勤め先に支障が出て、続けられなくなったりとか、やっぱり何か勤務条件変えられたりとか、そういうことがすぐ反映されちゃうので。
石阪委員長	・例えば、これでいうと豆の木でしたっけ。豆の木はこれは1つは講座もありますけれど、どうなんでしょう。相談というのは余り関係ないんですか。ここはどう。みんなでそういう悩みを共有したりするところではないんですか。どうなんですか。これはどんなところ。
寺島課長	・そこに載っています、いろんな相談。
石阪委員長	・これはやっぱり講座ですか。講座みたいな。

寺島課長	・豆の木で何かその相談をやったりしています。あとはサロンもやっていますし、講座もやっていますし。
石阪委員長	・恐らく、そういった周縁部を全部一通り担っているということですね。
寺島課長	・そうですね。いわゆるその登録者を全部メーリングリスト化して、いろんなサービスを提供していると。
石阪委員長	・例えば悩み事のある意味では相談機能も当然あるし、ある意味では家族にかわるようないろんな相談であったり、講座もそうですし、これは子ども預かってくれたりするわけ。子どもを預かるというわけじゃないのか。一緒に家族が。
寺島課長	・子どもを預かるのはちょっとまた別の施策になっていますね。ファミリーサポートですとか。
猪野委員	・でも、これは相談室が平日の午前9時から午後4時だと、多分行けないですよ。逆に土日だったらまだ行くことも、相談も。大体、ちょっと行政がかかると全部平日だから。
岩崎委員	・平日ですね。
猪野委員	・駆け込みたいけど、結局だめなんです。
石阪委員長	・そうですね。もうちょっとその辺は土日に。
猪野委員	・もうちょっと、やっぱり365日、交代で運営してくださると助かると思いますけどね。
石阪委員長	・そうか。例えば、自殺防止みたいなのがありましたね。あの相談、あれば365日でしたっけ。命の。何かあったと思うんですけど。
猪野委員	・電話は多分そうです。
寺島課長	・電話の相談ですよ。
石阪委員長	・電話相談だけでも何か。電話相談も一応平日なんですよ、多分。どうなんですか。電話相談じゃないんですか、これは。
寺島課長	・実際の対面です。
石阪委員長	・対面か。電話はあるのか。そうか、電話、窓口、メール、サロンなんですよ。
乾副委員長	・むしろ土日に開いていたほうがいいのかもかもしれませんね。365日とは言わず。土日。
猪野委員	・土日もあったほうがいいですよ。
上野委員	・平日の4時じゃ、まだ早いですよね。
石阪委員長	・今ぐらいで終わりですもんね。銀行みたいな感じですよ、窓口。 ・あとは、恐らく最近だとスマホを使うから、スマホで何かいろいろ情報提供なり、こういった対面も大事ですけど、ある程度共通のいろんな悩み事とか何とかいうのは、そういうのはチャート化したりとかは。
寺島課長	・していないと思います。
石阪委員長	・何かスマホ情報で、ちょっとしたことだったらぱっと検索すればわかるようなことが、そういう形で伝わると。でも、本当に話さなきゃいけないとか、対面しなきゃいけないというときは来ていただくとか、グラデーションつけたほうがいいのかという気は。
小川委員	・うちのほうは、そのほうがいい。区役所の職員の方も楽ですよ、相談するほうも気軽だと思うのね。それで、一步、二歩踏み込んでお話を相談をしたい方は、さらにここの窓口とか、この曜日とか、あなたのご要望の日に合わせてますよとかと細分化していったほうが、一般的にただ平日の何時までじゃ、ちょっとやっぱり、あの策がぶら下がってきているけれども、どれも採れない、見せかけだけの施策にすぎないのがっかりされるだけですよ。
石阪委員長	・だから、ここに来なければサービスが受けられないということではなくて、事前

	<p>に何か例えばスマホ情報で。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いずれにしても個別の相談になるはずですから。</li> <li>・最終的にはなる可能性が高いということになれば。</li> </ul>
小川委員	
石阪委員長	
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広くじゃなくて、取っ掛かりはここでちょっと聞いてみるとかぐらいのほうが、効果的にはすごく高まると思いますよね。同じ救ってあげたい、助けてあげたいという気持ちが本当にあるのであれば。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あとこれ、豆の木相談室というのはこれ1カ所なんですか。何カ所。どうなんでしょか。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ちょっと数は確認します。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交流事業をやっていて、この参加した方のアンケートから見た効果というところ、3ページに、なかなか参加して明るい気持ちになったというのもありますし。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本当だ。そうですね。インフルエンザの薬や予防法が勉強になったとか。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうです。だから、交流がもうちょっと進んでいくと、そこでお友達ができたり、ちょっとした相談、お互いに相談ができるようになるのではないかなと思います。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これ、例えば住区センターあたりで、もっとこういうのに特化した講座とかを。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童館やなんかでありますからね。そういうところで。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ありますよね。児童館ね。</li> </ul>
上野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ええ。大体6時か7時ぐらいまでは預かっていただけますからね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何か親と子どもと一緒に参加できるようなね。これ2カ所か。千住と梅田。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・L・ソフィアです。梅田はここで。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・L・ソフィア。</li> </ul>
猪野委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ここで月に1回開催されるんですよ。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豆の木自体はもっとあるんですか。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なるべく近くにあったほうがいいですね。自分の家の最寄りに。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。バギーを押して来る方が多いです。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例えば電車に乗ってとかになると、結構行くかなという気もしますよね。</li> </ul>
乾副委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もし、それが網羅できないんだったら、例えば毎週水曜日はこの地区に来ますとか、何かそういう巡回制にして、ある程度その地域の悩みであったりとか、そういうものを吸収できるような、そういうネットワークをつくっておくといいと思うんですよ。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豆の木サロンは巡回みたいな形で、11月は竹の塚と綾瀬とか。12月は梅田で、あとギャラクシティでやったりとか、そんな形で場所を変えてやっているようですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっているんですね、ちゃんとね。</li> </ul>
寺島課長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっています。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そういう情報が、だからある程度大事かもしれないですね。よくあるのは1カ所でずっとやっているとか、そこだけを開館してずっとやってしまうと、なかなか意外に便利なようで、そこまで行くのが結構大変ということになってしまうので。こういうのは結構出向いていくというのが大事です。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あとは、やっぱり父子世帯もちょっと問題なのかな。これはどっちかという母子を前提にプログラムって組まれているケース多いんですけど、恐らく圧倒的に父子世帯少ないですよ。父子のほうは。</li> </ul>
岩崎委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少ないですね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・父子のプログラムって、また難しいのかもしれないですね。こうなってくるとね。</li> </ul>

	何か1回なかったっけ、父子のプログラムってどこか。
徳永委員	・いかがでしょう。このまずはざっくばらんにということですけど、母子、父子の問題ですけれども、何かもしご提言とかご意見があれば。
石阪委員長	・さっき委員長がおっしゃっていた子育て支援というのはどういう感じなんですか。 ・簡単に言うと、子育てに関わるいろんなことをシェアする、みんなで。例えば、そういう1つの場所で、御飯をみんなで当番制にして与えるとか、例えば家事も分担し合うような、そういう仕組みをつくってしまう。ネットワークを作って。だから、行政がサービスをするんじゃなくて、自分たちでどうやって解決するかを話し合っただけで決めていくというやり方ですね。
徳永委員	・そういうのもおもしろそうだなとは思った。
石阪委員長	・だから、そういう仕組みが地域でできるといいんですけど、さっき言ったように一番の問題というのはこの母子家庭、父子家庭というのはネットワークをなかなか持っていないとか、孤立する傾向が日本では強いということなので、本来であれば孤立しがちななら、なおさらネットワークって大事なんですけれど、なかなかそれが難しいんですね。今の話だとね。
小川委員	・そうですね。いわゆるシェアハウスの家族版ですよ。
石阪委員長	・そうです。シェアハウスの家族でやるみたいな感じですね。
猪野委員	・学習センターとかを利用して、何か頻度を決めて、急なことがあってもそこで夜とか昼間子どもさん預かるとか、必ず何名かいてとか、そういうのが固定で必ず開かれていますとかとなれば理想的ですよ。
石阪委員長	・そうですね。それは行政の職員を置くとコストと時間がかかってしまうんですよ。そうすると結構大変。
猪野委員	・そこはNPOとかボランティアさん、お父さん、お母さんとか、あるいはシルバーさんとか、みんなが協力して。
石阪委員長	・だから、親とかシルバーとか、むしろNPOの中でそういうことができると。例えば行政の職員を夜張りつけるというのは結構大変ですね。雇用の問題もあるので。職員は多分つけられない。
猪野委員	・だから、いるのはそういう皆さんの善意でいいと思うんですけど、ただ、それを区がちゃんとバックアップするとかというふうにならないと、NPOだけだと多分難しい。
石阪委員長	・恐らく何かそういうプログラムができると、協創推進のほうで、そういう試みが今度はNPOで出てきて、それを行政として支援することはできると思うんですよ。
猪野委員	・案内も周知も、ある程度できますし。
石阪委員長	・そうそう。そうすると、結構母子家庭がそこに集中してくる可能性もあるんですよ。入ってくる。ここすごく便利だという。
小川委員	・テストケースを何か所かステーションを作って、やるということはまず大事ですよ。
石阪委員長	・島根県の浜田市というところが、母子家庭の移住ということを日本で最初に始めたんですけど、母子家庭に限定した移住ですね。入ってくると仕事と車と家を貸与します。提供しますということで、全国から母子家庭が。それがいいか悪いかは別にしても、少なくともここは支援をしますと。過疎に悩んでいるまちですから、とにかくお母さんと子どもでいいから来てもらって、そこをふるさとにして頑張ってもらいたいという思いで、移住施策としてやっているところもあるので、やっぱりやり方なんですよ。だから、母子というのは結構負担がかかって、どっちかとい



	うと区として迷惑じゃなくて、どんどんやっぱり来てもらって構わないと。足立区は全部それをサービスとしてやっていくというぐらいの形に、僕は足立区は今やろうとしていると思っているんですけど、それを。極端に言うと、周辺……
小川委員 石阪委員長	・そうすると、お父さん方も安心してお仕事に専念できるから。 ・そうそう、足立区に住めば母子家庭は安心だと。周りの区から僕は多分移ってくるんじゃないかと思うんですね、そのうち。
猪野委員 小川委員	・そうですよ、せっかく学習センターあるから。 ・まず経済力が上がらなかつたら何もできないですもんね。支援では限られていますからね。区税でやっているわけですから。
石阪委員長	・そうなんですね。ちなみにその浜田市は女性にどういう仕事を紹介するかというと、福祉なんですね。介護と福祉を提供する。高齢者がいっぱい多いんで、で、人材不足ですから、それで働いてもらうということもやっているの。何か地域の中で母子家庭をむしろ支援するという、強く支援していくと。場合によってはよそから移ってきてもらっても構わないという、そういうぐらいの思い切りがないと、多分なかなか、じゃ今いる母子家庭をどうやって支援しようかではなくて、母子にとって非常に住みやすい区というぐらいまで持っていきたいですね。そうすると足立区としての区としての意義みたいなものが、やっぱり足立区はそういう方に優しいという。
小川委員	・ポイントというか、ここはいいねというようなのがまずできれば、どんどん入ってもきますし、活性化にもなりますよね。
石阪委員長	・あとは、あわせて母子家庭が、いわゆる単なる支援を受けるだけではなくて、やっぱりキャリアアップさせて、子どもたちがそこで勉強して進学してもらうということもあわせてやっていかないと、多分、入れるだけ入れて何もしないというのはやっぱり問題ですから。
小川委員	・今やっていることはほとんどがそのことで、委員長がおっしゃったように、支援するだけじゃないですか。
石阪委員長 小川委員	・うん、どちらかというと。 ・足立区に限らず、議員の先生方も全部福祉、福祉でオウムのように言っていますでしょう。だけど、これは私、すごくある程度の方は本当に必要ですけども、そのぎりぎりの境で踏ん張れるよという人の芽までそいでいることがままあるんですね。やはりそのあたりをしっかりと歯止めをかけて、大事なお金、財政ですから。
石阪委員長	・そうです。福祉の部分とそうじゃない、共助を分けて考えないと。でも、足立区は多分やっているはず。全部福祉でやらないと区長、言ってますね。
寺島課長 石阪委員長	・そうですね。 ・つまり、一番楽なのは現金を渡してしまうことなんですけれど、それをやったら終わりという感じなんですよ。だから、そうじゃないやり方を。
小川委員	・受ける人もプライドなくすしね。やはり私たちの年齢の親は、うちの父なんかもよく言っていましたけど、腐っても鯛だよと、人様の世話になんかならないと、昔だからいろんな制度、それは今とは違いますが、それなりにあったはずですよ。でも、そういうことを人にも勧めないし、もとより自分はどのような環境の中でもそんなことは利用するような考えを持ちちゃいけないようなことをみんなに言っていましたよね。
石阪委員長	・そういう意味では、地域が自立するためには、ネットワークをやっぱり作って、行政に頼らずにある程度できる部分はやるという、そういう意思を示さないと、なかなかこの部分も解決していくのは難しいかなという。

小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でも、今若い人なんかでも生活保護、私なんかもこの年になってやっと生活保護ってこういう制度なんだ、お金はこんなに出るんだというのを知りましたが、若い人たちは平気で利用している人もいないですか。だから、そういうふうに一種むしばんだ行政の悪ですよ。はっきり言うとね。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。メリットもデメリットも、恐らくあると思うんです。</li> </ul>
小川委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何でもありますけれどね。それが変なふうにご利用されちゃったから、私たちはせめてそういう利用されないで、もっと本当に成果が挙がるようなことをしたい。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと言うと、ここは男女共同参画の議論の場ですから、むしろいろんな方々が参画して、そういう社会を作っていくということだとして非常に大事だということでは、多分一致していると思うんですよ。ありがとうございます。</li> </ul>
石阪委員長	<p><b>5. 年次報告作成に向けた提言</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ちょっと時間も迫ってまいりましたので、一応今日簡単にですけれども、皆さんからご意見いただきました。</li> <li>・次回、今日皆さんからいただいた意見を少しまとめたものを、年次報告書のフォーマットの形に落として、これをまたもとに次回さらに議論して、最終報告書にまとめていくと、そういう形にしたいと思いますので、恐らくテーマ的にはこの3つは変わりませんので、ぜひ、1カ月後になりますけれども、この主に2点、3点について、皆さんまたちょっといろいろお考えいただいて、せっかくだからこういうことをちょっと提言しておこうとか、こういうことをちょっと言っておきたいということがあったら、ぜひ考えてきていただきたいと思います。また次回のこの場でご披露いただければと思います。</li> </ul>
石阪委員長	<p><b>6. 次回（11/28）議事予定</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それでは、次回ですけれども、11月28日ですね。同じく木曜日になります。</li> <li>・ちょっとここで、これですね。この資料は先ほど皆さんから出していただいたもの。結局変更はどうでしたか。</li> </ul>
佐藤係長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・変更はございませんでした。</li> <li>・皆さんにお手元の集計表をそのまま今お配りしたものに落とし込んでおります。その結果、全部で総合評価、合計点が78点ということで、今回、C評価の結果になりました。Cというのは総合評価で60点から80点未満ということなので、78点はCになります。</li> <li>・前年度、この時期に行った評価の点数ですが、62点でC評価だったのですが、C評価の中でも下寄りから上寄りになったという結果でございます。</li> <li>・主な意見としても、非常に皆さんのいろいろ好評をいただいているところの評価をいただいております。</li> <li>・集客のところ（2）番の8番ですが、こちらについては、ちなみに今回の評価については、88%でした。前回につきましては、56.6%だったんですね。集客については、30ポイントぐらい上がったところになります。</li> <li>・以上、C評価ということですが、前年より上ぶれになったというところがございます。この結果、今現在委託の事業者については、来年度も更新ということになりました。以上でございます。</li> </ul>
石阪委員長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かなり伸びたということで、まだCと、逆に言えば伸びしろがあるということでもありますので、恐らくもう一度、皆さんには評価いただくこともありますから、その際またよろしくお願いします。今年度については、こういう形で評価をさせていただきました。</li> </ul>
石阪委員長	<p><b>7. 事務連絡</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それでは、その他、連絡事項がありましたらお願いします。</li> </ul>

- |  |  |
|--|--|
|  | <ul style="list-style-type: none"><li>・ほかよろしいでしょうか。委員の皆さんから何かご連絡はよろしいでしょうか。</li><li>・それでは、以上をもちまして本日の委員会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。</li></ul> |
|--|--|